

---

# ドラゴノイド～龍化病～

黒月古城

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴノイド〜龍化病〜

### 【Nコード】

N7209R

### 【作者名】

黒月古城

### 【あらすじ】

突如身体に龍の特性が現れる病、龍化病。孤独な少年に降りかかった悪夢は少年から何を奪い、何を与えたのか。人としての自分、人外としての自分。狭間でゆれる少年の心はどこへ向かうのだろうか。

## 悪夢のプレゼント（前書き）

ラグナロクの在庫が少なくなってきたので、前に書き溜めといった物を投稿します

シリアスな前書きですが、実はそうでもなかったりしますww

## 悪夢のプレゼント

ドラゴノイド 龍化病

僕の名は赤羽龍斗。孤児。18歳である。少し前まで孤児院に居たが、18歳の誕生日をきっかけに施設を卒業した。いや、せざるを得なかった・・・というべきかな？そして今の僕はといえば・・・

「りゅーとさーん、ごはーんごーはーんー!!」

・・現在とある荘にてハウスキーパー、家政夫として働いている。まあ、ここまでできたのは一言では語りつくせない、本当に色々あって、色々あったんだけど・・・  
もうちょつと待ってて、飢えたあいつらの昼ご飯、作つとかないとね。

えーつと、どこまで話したっけ・・・そうそう、施設を卒業直前からだったかな？

そして今更だけど伝えておかないといけないことがあるんだ。僕は普通の人間ではない。

頭に角、背中に羽、皮膚の一部には鱗が付いてる。そして圧倒的なまでに強い力、つまり怪力。竜人、ドラゴノイド。

18歳の誕生日にその悪夢のプレゼントは届いた。

「龍ちゃんももう卒業間近ねえ・・・おばちゃん寂しいわー施設出

てもおばちゃんのこと忘れんといてな」

「はい、おばさんのことはいつまでも忘れませんよ。」

やわらかい笑顔（と、本人はそう思っている）に建前の笑顔で答える。結局のところ・・・ウソである。この手のおばさんは下手に反抗すると納豆のネバネバ並みにうっとうしい。ここは自己流・世渡り術で乗り切る。また他のおばさんたちに絡まれないうちに自室へと帰り、大きなヘッドフォンをつけ、携帯に接続し、音楽を流す。ちなみに携帯とヘッドフォンはなけなしのバイト代をはたいて買ったものである。好きな時間だった。暮れなずむ町を窓から眺めながらゆっくりと音楽に耳を傾け、たそがれる。心が落ち着く時間だった。（聴いているのはマ。シمام。ホル。ンだったりする。）

ふと目を覚ます。寝てしまっていたらしい。もうすっかり暗くなり、肌寒い。窓を閉め、食堂へ行こうとしたその瞬間、悪夢が始まった。

激痛。耐え難いほどの激痛。そのときは喻えようもなかったけれど、いまならわかる。頭と背中を重点的に（？）、全身に赤くなるまで熱した鉄の剣を突き刺され、そのままえぐられている様な痛みが走った。しかし下手に騒いで面倒なことになるのはごめんだ。ベッドにある枕を噛んで必死に声を殺した。なぜか確信があつた、絶対にこの痛みでは死なないという奇妙な確信が脳裏に浮かんだからだ。そうしてまた僕は意識を失った。

音がする。チュンチュンというわかりやすい朝が来たという知らせ

だ。どうやらそのまま眠ってしまったらしい。本能的にかどうかはわからないが、ベッドの上にあったはずの毛布をかぶっていた。肌寒い。激痛の余韻は全くなく、むしろ普段より体が軽く感じた。ゆっくりと起きだす。違和感を覚えた。毛布が一向にずり落ちない。何かに引っかかっているようだ。ふと後頭部に触れてみる。本当なら髪の毛に触れたはずだが、そこに生えていたのは髪の毛では無かった。代わりにもっと硬いものに手が触れた。骨ばった、カルシウム質の、硬い、紛れもない角。真っ直ぐには伸びておらず、喩えていうなら波線（〰）のように曲がりくねっている。十センチほどの角。

愕然とした。反射的に顔に手を触れる。ふと手を見ると鱗が付いていた。魚のような薄いものではなく、爬虫類を彷彿させる硬いしっかりした鱗。手首から拳の頭にかけてびっしりと。うつすら赤いその鱗は朝日に照らされて桜色に輝いた。部屋に備え付けの大きめの鏡の前に立つ。少し離れれば全身が写るほどの大きさの鏡だ。

愕然二回目。シャツを突き破って、僕の背中には大きなコウモリのような翼が、まるで最初からそこにあったかのように、生えていたのである。

信じられない。それはそうだろう。いきなり何の脈絡もなくこんなことになれば誰だって気が動転するだろう。しかし不思議と僕の心は落ち着いていた。ああやっぱこうなったか、という諦めにも似た感情を覚えていた。激痛を味わっていたとき、絶対に自分は死なないと感じていたときのように。数十分後、気分を落ち着かせるため歯磨きの後のモーニングカフェオレ（最近のマイブームである）を飲み、ストックしておいた菓子パンを胃袋に流し込む。

そして少し早いが、施設を抜けることにした。この姿を誰にも見られてはいけない、というのがこういう話のセオリーだろう。幸いにも早朝で誰も起きてはいないようだ。ふとある考えが浮かんだ。今までお世話になったベッドに歩み寄り、普段ならできないということが解っているにもかかわらず、片手でベッドの端をつかみ、持ち上げてみた。

持ち上がった。簡単に。まるで爪楊枝を持つかのごとく、敷布団もろもろあわせて重量およそ百キロの鉄製のベッドが簡単に持ち上がった。ここ最近掃除していなかったツケの埃が舞う。これほどの力なら、背中の翼を使って飛べるだろうか。翼に力をこめてみる。多すぎこちないが、翼は力強く羽ばたいた。よし、いける。荷物をボストンバッグに詰める。大して持っていくものは無かったのが幸いだった。少し迷ったのがゲームである。持っていて売却して生活費にでもしようかと思ったが、未成年がゲームを売るのは色々面倒なことが起きるので（保護者の確認とか）放置しておく。さよなら、僕のP.O.2。

冬も近くなり、最近開けることの無かった窓を全開にする。ボストンバッグを一応念のためベルトで自分の体と固定し、申し訳程度の足場に乗りに出す。僕の部屋は3階だ。転落防止用の策を乗り越え、15センチに満たない足場に出る。

こういうときというのはカッコいい言い回しを言いながら飛び立つのもいいだろう。今僕を厨二病とか思ったやつ、前出ろ、前だ。

次の瞬間、僕は翼を広げて自由の空に飛び立った。

「……寒い。空を飛ぶことがこんなに寒いと思わなかった。余り喋らず、物静かで冷静沈着で頭が切れると思われがちな僕だが、（あくまで他人の評価である）意外と向こう見ずでドジも多い。他人からよく「天然なんだな」とよく言われる。心外だ。」

落ちそうになったら羽ばたき、ある程度上昇するとグライダーのように滑空する。やはり菓子パンだけではそうそう力は出ない。飛び始めて数十キロの地点で公園を見つけた。そこに下りることにする。今気づいたが視力も尋常じゃなく上がっているらしい。上空四、五十メートルからア리가えさを運ぼうと奮闘する様子のはつきり見えた。そして周りに誰もいないかを確かめ、僕は公園の真ん中あたりに降り立った。次の瞬間、僕の運命の歯車が大きく動き出した。

「あ……あの……」

「………」

中に入れるテントウムシの形の遊具の中から少女が出てきた。ボストンバッグに付けていたキーホルダーが揺れる。盲点だった。こんな早朝に遊具の中に少女がいなくても限らないじゃないか……。いや、まずありえないだろ、落ち着け、これは僕が寝ぼけて見ている幻覚だ……。つまらない現実逃避に僕が混乱していると少女が口を開いた。

「失礼を承知で聞きます、……」

ああ、終わった……。僕の人生……。これから僕は珍獣として売られ、世界中で引っぱりまわされるのだろう……。もしくはマッドサイエントティストに死ぬまで研究材料にされるか……。嫌だ……。

「そのストラップください!!!」

・・・長い沈黙が辺りに流れた。

## 悪夢のプレゼント（後書き）

ゼノムといい、龍斗くんといい、小生の小説の主人公はツンデレば  
つかですねww

## 出会いと転機（前書き）

ドラゴンといえば、モンハンのドラゴンはカッコいいですよ〜

この前下位のレウスさんにボコボコにされましたww一応上位ハンターなんですけどね…

## 出会いと転機

えーと……今僕はとある荘の一室に前回突飛なセリフを吐いた少女の部屋にいる。続きを話そう。

あれから僕はこの謎の少女に連れられて彼女の住んでいる荘に連れられてきた。<sup>ええとそう</sup>江流<sup>えりゅう</sup>駑<sup>ぶ</sup>荘、と読むのだそうだ。変わった名前である。ちなみにそのままの姿ではなく、角はニット帽でごまかし、翼は知らないうちに小さくなっていたのでそのままダウンジャケットを羽織ってごまかした。

「いやー朝早くに目が覚めたからその辺歩いてたら眠くなって、テントウムシの遊具の中で二度寝して、起きたらレアもののキーホルダーを持つてる人がいるなんてまさに奇跡じゃないかしら！」

「説明臭い長台詞ご苦労様です……ってかそれだけで僕をここに招き入れたのですか!?!……まあいいでしよう、このキーホルダーなら差し上げますよ。大事にしてください」

「マジで!?!やったー!じゃあお返しってことでなんか困ってること無い?」

「そうですね……今住むとこと仕事を探して……って何言ってるんだ僕は?!」

少し考えるように顎に手をやる彼女。僕ときたら、その場の雰囲気にな流されっぱなしである。我ながら少し情けない

「ならこの荘に住まない?ハウスキーパーとして雇ってあげるよ?

私ここの大家なんだ」

「…マジで？」

「うん、みんな喜ぶよ。あなたカッコいいし！俺の嫁にしたいくらい！」

いやその理屈はおかしい、と突っ込みたかったが根本的な問題を僕は思い出した。

「そういえば…僕の姿を見ましたよね。なぜ僕を好奇心な目で見ないのですか？普通なら驚いて逃げるくらいはするのではないですか？」

すると少女は神妙なドヤ顔でちゅちゅちゅ、と人差し指を振る。

「人間誰もがそんなだとは限らないよ。そりや最初はびっくりしたけど、よく見ればあなたなんというか寂しそだったの。そして母性本能が疼いちゃってさ、あなたをここまで連れてきたのよ。そんな秘密抱えて一人で生きるなんて大変でしょう？」

今までかけられたことの無いやさしい言葉に、なんだか胸が熱くなってきた。と、涙が出てきそうになったのでそっぽを向いて強がってみる。

「ぼ、僕は別に…そんな雰囲気出してるつもり無かったのに…ま、まあお礼くらいはっ……………あ、っありがとう…」

我ながら情けない（本日二回目）。自分でも隠せていないことが分かるくらいに声が上ずっている。すると少女が僕の正面に立ち、

大きく包み込むように抱擁した。それからしばらく、彼女は僕の鳴咽が止まるまで優しい表情をしながら抱きしめてくれていた。

「あらためてよろしくね、え〜っと…」

そういえば自己紹介がまだだった。

「赤羽龍斗です。これからお世話になります」

「わたしは空崎彩音<sup>そらさきあやね</sup>。よろしくネ、りゅーとサン！」

こうして僕は新しい新天地で頑張ることになったのである。

「そういえば他の住民の子にも挨拶しとかないとね……今朝は週一の会議、エルドミーティングだからちようどいいね、そのときりゅーとサンを紹介しましょう」

これから暮らしていく上で住民の方には何かとお世話になりそうだ。挨拶はしっかりと、失礼の無いように接さなければ……

しばらくして管理人室の扉が開いた。

「おふあようごはいまふ〜」

欠伸交混じりの挨拶をしながら数人の少女が入ってきた。ふと疑問に思う。男の影が見えない。

「おはようみんな。というわけで新しい住人が増えるよ！紹介しましょう、赤羽龍斗サンです！」

一瞬にして少女たちの目の色が変わった。これから狩りに出かける猛獣を思わせる獰猛な目。僕の不安は現実となった。

「あの…空崎さん……？つかぬ事をお聞きますがこちらの男性の方は…？」

まるで飢えた猛獣の檻にエサとして放り込まれた気分である。…今ジュルリって聞こえたような気がした。

「大家でいいよ？ここは女子寮だよ。あそつか、あなた男か。まいつか！」

「よくねえ！」

初歩的な問題だった。

「大家さん？このカツコいい人は……？」

「言ったでしょ、新しい住民の龍斗サン。ハウスキーパーとしてうちに雇ったのよ。仲良くしてあげてね」

一瞬にして少女に囲まれ、次々に挨拶をされる。正直、男に飢えていたと認識せざるを得なかった。挨拶にまぎれてヘンなところ触ろうとしてくる人もいた。というかおそらく全員。というわけで早速僕

の仕事は始まった。洗濯物についての注意、（異性の洗濯物を洗うのだ、下着類は自分たちで洗ってもらう）朝と夜のまかないに使う食材について（夕方のタイムセールスを狙って住民一人と近くのスーパーに行く）などなど……気づけばとくに昼ご飯の時間になっていた。冷蔵庫にある食材を使って何かまかないを作る。今回は住民の方が作ってくれるようだ。腕前を見るためと手伝うためにキッチンへ同行する。

「今回は私が料理するから。私はマイナ。きんらあまいな如月舞奈よ。よろしくね、龍斗さん」

カッコいい。大人びた雰囲気でした。かり者のお姉さんを思わせる、そんな感じだ。続いて隣の背が小さめの女の子が自己紹介をする。

「私は大地春沙。だいち はるさ最初色々大変だろうけどがんばってね！」

名前の通りおおらかで元気いっぱいの子の明るい少女だ。話しているとこちらも元気になるような気がした。

「さて、今回は何を作ろうかなあ……今日は休日で皆いるし……」

「お昼だしおにぎりでもいいんじゃない？見たところ冷蔵庫の食材、かなり頼りないよ？」

春沙が冷蔵庫を覗き込みながら言う。なるほど、冷蔵庫には人数分の納豆、卵パック、ウィンナーなどまさしく余り物ぐらいしかない。奥のほうに黒く変色した謎の物体が入ったパックと盛大に芽の出たたまねぎがちらりと見えたような気がした。後で片付けとこう。この人たちの料理の腕前を見れないのは残念だが、おにぎりの形を見れば大体解るような気がする。そこを観察して見るか。もち、手

伝いつつ。

「お、味噌があるな。味噌汁でも作るかな…このたまねぎ使えるかなあ……後卵でも割り入れて…」

「ふうん、味噌汁に卵かあ…その発想は無かったなあ」

「お吸い物にも入れるでしょう？まああつちはとき卵ですけどね。じゃあ味噌汁と配膳は任せてください、貴女方はおにぎりを頼みます」

「「はい」」

数十分後、居間の食卓の上には僕が作った味噌汁と舞奈さんがにぎったおにぎり、春沙さんが作ったウィンナー入りオムレツが並んでいた。

「では…いただきます！」

皆いつせいに味噌汁を口につけた。料理番組とかでよく芸能人が試食者の感想をときどきしながら待っているような気分だ。

「これ……」

き、来た?!思わず動揺してしまった

「すつごくおいしい！」

ホッと胸をなでおろす。喜んでくれて幸いだ。

「中の卵も半熟で味噌汁と混ぜるとまるやかになって…つか、たまねぎなんてあったの？」

「盛大に芽が出た奴がありました！が全く使えないわけじゃありませんし…喜んでくれて幸いです」

「グスン…」

えっ?! 大家さん泣いてる?! 僕なんか地雷踏んだ?!

「懐かしい…お母さんが作ってくれたみたい…」

すると隣の舞奈さんが小声でこういった。

「大家さん、小さいころにお母さんを亡くしてるのよ。私たちも味噌汁作ったりしてたんだけど、ここまで褒められたの龍斗さんだけよ。ほんとにすごいね…」

そういえばさつきから住民たちの視線が猛獣の目から尊敬の目に変わっていたのはそのためか。しかし…明るく振舞っていた大家さんがそんな暗い過去を背負っていたなんて…大家さんが何の躊躇も無く僕をここに招き入れた気持ちが少しわかった。僕から孤独のおいを嗅ぎ取ったのだろうか。同じ境遇を持つもの同士惹かれ合う…なんだこの俗に言うギャルゲーとか少女マンガみたいな展開。ないない。それからしばらく僕たちは暖かい家庭の味を味わっていた。

## 出会いと転機（後書き）

寒い日の味噌汁ってなんであんなに美味しいんでしょうね

## 第2の龍化者（前書き）

やっべえドラゴノイドの在庫がこれで最後だ…

…続き書くか…

## 第2の龍化者

それから数日間、僕はこの仕事の大変さを知った。洗濯物の仕分けには少なからずそれが混入していたり……恥ずかしいから空気読んでくれ。無理やり部屋に連れ込まれたと思ったら掃除の手伝いをさせられたり（掃除のたびそういうものなどを目にしてしまい、わざわざ赤面する僕）。一度舞奈さんの部屋に食事の呼び出しにいったときに……着替え……いや、なんでもない。最低だ、僕……（決してそういうことをしたわけではないが）性別の壁がやたら高く感じた。

「今夜は僕が当番か。では買い物に行ってきます」

「じゃあ私も」

七人一斉に手を挙げる。なんだか七人の間で火花が散っているような気がしたが、そこはスルーする。

「慣れてきたんで結構です」

冷たくあしらい、とつとと買い物に出かける。今夜はピーマンの肉詰めでも……春沙さん、野菜大嫌いだしなあ。あとピーマンの胡麻和えでも。あれなら春沙さんでも食べやすいだろうし。チラシの情報で僕は大体のメニューを決める。今回はピーマンが安い。春沙さんとその他の必死の隠蔽工作もむなく、今夜は野菜祭りだ。江瑠鷺荘、肉食率高すぎ……商店街を歩いて食材を買い集め、自分の小遣いでコーヒーを買って公園のベンチで一息つく。

「やだ、あれだよな？たそがれのニット帽？」

「知ってる、毎日女の子に引つ張りまわされてる不幸君でしょ？」

「男の子なら誰しも羨む境遇よね。ハーレムっていうの？」

「ははははははは！」「きゅん」

くだらない女子高生の戯言だ。聞き流す。まったく実際にこんな境遇になつたところで、その苦勞は本人にしか分からない。下らない無いものねだりだ。……この町に来てから僕はどんな人間として認識されているのだらう？ どうでもいいことだが、近所付き合ひに差し障るといけないし……と、頭に鈍痛が走つた。いや、痛いというより熱い。頭というより角に。どんどん熱くなつていく。ふと、前から高校一年ぐらいの女の子が歩いてきた。ショートカットでメガネをかけている。失礼だが、いかにも賢しそうである。

「こんにちは」

突然のことに驚いたが、挨拶を返す。高校生くらいならさっきのチヤラ女のように僕の事を噂などで耳にしている可能性が高い。興味本位で近づいてきたといったところか。しかし、そんなボクの予想は見事に外れた。

「こんにちは」

「ふうん……あなた、人じゃないでしょう？」

じろじろこちらを値踏みするように見ながらとんでもないことをさ  
らりと言つてのける。驚愕した。これについて知っている人物がい  
た。ということは少なからず僕以外にもこんなことになつた人がい

るというのか？…慎重に話を進めていく。

「君はこれについて何か知っているのか？」

「ええ……私もそれなのよ」

連れてこられたのは人気のない空き地である。なんだかその辺に漂う空気も陰湿な印象を受ける。

「君は何者だ？なぜこれについて知っている？」

「どうすればこれが治るか知ってる？簡単なことなのよ」

唐突に本題に入る少女。周りの空気がざらりと殺気を帯びる。地面の下から何か自分が貫こうと迫ってくるのが何故かわかった。次の瞬間僕が立っていた場所から巨大な棘付きつる植物が生えてきた。間一髪。気に入っていたジーンズが破けてしまった。あーあ、やっちゃまった……意外とジーンズって高いんだなあ……でもこれはこれでダメージジーンズってのもあるし……なんてことを考えていたら少女が話し始めた。

「ずいぶんと余裕なのね。教えてあげるわ。これは龍化病って言うてね。その名のとおり龍になるの。人によって個人差はあるようだけど……私は……そうね、緑神龍といったところかしら。自然を味方につけ、植物を操れる能力よ」

「ずいぶんとたいそうな能力だね…で、なんで僕を殺そうとしたのかな？」

「これが唯一の龍化病を治す方法なのよ。同じ境遇の人同士で殺し合うことで元の人間に戻るの」

少女の顔に捻じ曲がった笑顔が浮かんだ。顔立ちはいいのにもったいねえなあ…

「つまらないね」

本心だった。先ほどの言葉で僕は彼女を完全に敵として認識する。

「……………何？」

「己のエゴのために他人を傷つけていいと本当に思っているのか？本当に…下らない…てめえの心のほうがよっぽど病んでるよ」

「黙れ！！貴様なんかは何が解ると言うの？！」

情け容赦なくつる植物を操って攻撃してくる少女。殺人もぐらたたきのようである。地面が穴ぼこだらけになっていく。あゝあ、どうすんの後片付け…

「何もしていないのに、何の罪も無いこの私が！こんな不条理が許されるはずは無いわ！私は元の生活を取り戻すために戦う！戦う相手是谁であっても！それがどんなことであろうとも！」

なんだか目が慣れてきた。なんだ、簡単なパターン攻撃じゃないか。相手は攻撃が避けられているのにますます腹を立て、いつそう攻撃の人数を増やし、強くしているようだ。試してみるか。砂をかけて目晦まししてから僕はジャケットを脱いだ。あらわになる僕の翼。そして買い物籠と共に隅っこへ寄せておく。

「やかましいなあ……喋る元氣があるなら攻撃にベクトルを向けた方がいいんじゃないか？」

「あんたは今の寂しい状態から脱却したいだけだろ？病気がどうかじゃねえ。一人だけになるのが、いや、もうなってるのか？孤独を恐れてるだけだろ？寂しがりやのミドリはトカゲちゃん？」

「うおらあああああああ！！」

地面に足を踏ん張って固定し、思い切りよく広げた翼で空気を投げつけるように

相手に向かって羽ばたいた。その辺のあらゆるものが少女に飛んでいく。

つる植物を自分の前に盾にするように展開する。かかった。

「そこだ！」

全力疾走でから空きのサイドへとまわり、驚いている少女の首根っこを掴み、壁に叩きつけた。

「かはっ……」

勝負あった。手を離すとぐったりと壁にそってずるずると崩れおちる少女。意識朦朧で昏倒寸前である。

「口よりも戦闘に集中しろよ…戦闘時喋っていいのは見方に連絡するときだけだよ。貴様のエゴで僕は殺されるわけにはいかない。そして僕のエゴで貴様を殺しはしない。僕はこの力を罰だと考えてもいない。今の生活も悪くはないと思ってるんでね」

ジャケットと荷物を回収し、全力疾走で帰るためにアキレス腱を伸ばす。

「どうしても僕を殺したいと思ってるんならまた僕に会いに来ればいい。その度にコテンパンにしてやるけどな！…ああそれと、」

帰る前にちよつと一言言っておくか。敵とはいえちよつと言いすぎた気がするし

「人と違う人生送って何が悪い。普通じゃねえなんてそうそうねえぜ？なんならその力使って植物についての研究とかしたらどうよ？」

翼を縮め、ジャケットを羽織り、クラウチングスタートで全力疾走。江流弩荘への帰路を急ぐ。早くしないとおしおきと称して逆セクハ

ラを受けてしまつかもしれないな…なんてことを考えながら僕は走った。ジャケットに付いた1つのオナモミに気づかぬまま。

「ごめん、ただいま…ハアハア……」

「遅ーい、龍さん早くー!」

「わかったよ…息くらいつかせてくれよなア……」

といいつつエプロンを着て（自前の龍のプリントが入ったカッコーいやつである）食事の準備を始めた。いざ、台所という名の戦場へ・  
・!

## 第2の龍化者（後書き）

ちなみに龍斗くんの戦闘力はボルシャックドラゴンレベルです。その気になれば戦車とかパンチ一発で壊せますよ？（笑）

## それでも龍ですから（前書き）

江瑠弩荘の住民まとめです

赤羽龍斗<sup>あかばね りゅうと</sup>…江瑠弩荘専属ハウスキーパー。18歳。謎の病、龍化病を発祥し、もといいたた孤児院から脱走。偶然出会った空埼彩音に拾われ、現在にいる。ツツコミ。

空埼彩音<sup>そうさき あやね</sup>…大家さん。17歳。自由人で意外と食欲旺盛。なのに少食。ご飯前にお菓子を食べてご飯を残すので、よく龍斗に怒られている。

大地春沙<sup>だいち はるさ</sup>…江瑠弩荘最年少住民。16歳。料理の腕は江瑠弩荘一番。甘えたい盛り。思春期もあいまってよく龍斗にセクハラまがいのことをしている

如月舞奈<sup>きさらぎ まいな</sup>…江瑠弩荘一のスタイル。17歳。特に運動などはしていないにもかかわらず、超人的な動きを見せることがある。江瑠弩荘一の大喰らい

これでも龍ですから

「おまたせ！出来たよ晩御飯！今日はベターにカレーライ…す」

皆を呼びにリビングに当たる部屋に行くところには昼間倒した少女が住民たちと仲良く談笑していたのである。今日の今日でよくこれだな…つか、どうやって僕の居場所がわかったんだろ？今のところ殺気は感じられなかったので大丈夫だろうが…

「あ、りゅーとさん！この娘今日からここに住むことになったから！仲良くしてあげてね…浮気すんじゃないぞ？」

「和やかなムードのセリフの最後にドスのきいた凄まじいセリフが入ったような気がするんですが？！何が浮気だよおい」

少女は自己紹介を始めた。

「緋色百合ヒイロコリンです。これからお世話になりますね、りゅーとサン？」

メガネを中指で押し上げながらニヤリと挨拶をしてきた。顔は笑っているが眼が笑っていない。それどころかどす黒い思念が見て取れるほど黒い瞳は濁っていた

。邪悪なオーラが僕だけに向けて発散している。昼間のことをやりというか根に持っているようだ。

「ちょーつとこつち来てくださいヒイロさん？」

「あらなにかしら？もしかしてココの新しい住民はこの人に手を出されるのかしら？」

「そんなつもりだったの？ りゅうとサン？」

大家さんのこめかみに青筋が見えたような気がするが…僕はそんなにタラシに見えるのかな？ 自分に自信がなくなってきた。この荘に人外が二人も住むのだ。話はしておかなければならないだろう。

「違いますよ！！ 昼間に彼女と会ったんですっ！！ ちょっと話があるだけでっ！！」

「あら、あれのことかしら？ 龍…」

「とつととこつち来いや根暗眼鏡…」

「ぴい？！」

その場にいた住民全員が凍りついたような気がしたがいつもどおり無視する。ヒイロの頭を掴んで隣の部屋に連れて行く。ヒイロも若干怯えた表情をしているような気がした。

## 僕の部屋

「まず問おう。問一、なぜ僕の居場所がわかった？ 問二、なぜここに来た？」

指関節を鳴らしながらいつもより5倍ましの鋭い視線で睨みを利かせる。逃げられないように（どっち道できないだろうが）壁際に追いやり、壁に手のひらを置く。傍からみればカツアゲしているよう

にしか見えない光景である。

「わ、私は<sup>わたくし</sup>s、植物使いです…ドサクサまぎれて貴方の服にオナモミ型の発信機のようなものをつけたんです…」

昼間とは打って変わって、本当に借りてきた猫みたいになってしまったヒイロ。

「……続ける」

「ひゃい！！ぶ、ぶっちゃけいつでも貴方を襲えるようにと…」

「いいこと教えてやるぜ根暗眼鏡…」

壁に置いていた手に力を入れると、壁にヒビが入った。

「戦いを吹っかけるのは構わんが少なくとも他人に迷惑の及ばないところで喧嘩を吹っかける。あとむやみやたらに病のことを口に出すな。ここの住民に悟られるな。以上」

「ひゃい！！…」

「落ち着いたら居間に戻って来い、晩飯はもう出来てる。冷えないうちにとつとと食えよ？」

「……………」

再び気の抜けたようにへたり込む緋色。これでしばらくこの江瑠弩荘は安泰だ。さって、配膳やつてくれるかな…居間のふすまを開けると皆ビクツツと怯えた表情になり、そそくさとその場を離れよ

うとした。

「あ、ああ私おハシださなきゃ!!」

「て、手伝うね!!」

全速力で走り去っていく春沙さん。それについて大家さんも逃げるようにこの場を去っていった。…やりすぎたかな？

「皆怯えているのよ、貴方の意外な一面にね」

唯一その場を離れていなかったマイナさん。この人はいつでも堂々としてるなあ…怖いもんなんかないんじゃないか？

「心配しないで。私にも怖いものくらいあるわよ?」

「まじですか?! つかなんでわかったんですか?! 今のモノローグ口に出してなんかいませんでしたよ?!」

「そうね、強いて言うなら今は饅頭が怖いわ」

「落語かつ!! なんて華麗なスルーですか?! つか昼飯前に饅頭いくつも平らげないでくださいよ!! 食えなくなったらどうするんですか?!」

「大丈夫よ、なんだかんだで完食してるから」

ホントに揺るがないなあ、この人は。マイナさんはよくご飯前にお菓子を食べているが、それでもちゃんとご飯を完食している。しかも大盛りお代わりだ。つられて食べてしまった春沙さんや大家さん

がご飯を残してしまうので、いつも僕が二人を叱ることになるのだが…あれだけ食つといてどうやってこのスタイルを維持しているのだろう。日本中の女性が羨むようなスタイルでありながら（本人に自覚は薄いのだが）食生活はとても自堕落である。男としてもうらやましい限りである。

「それよりここにいない人たちを連れ戻してあげないと、いつまで経っても頂きますっていえないんじゃない？」

「そんなに恐ろしかったですか？僕」

「そうね、あの子達ああ見えて幼いのよ。だから本気で怒ってる人をあまり見たことがなかったの。しっかりしてるようだけど、本気で怒ってくれる人がほとんどいなかったのが大きいわね。私は怒るとかそういうのは二ガテだし」

「そんなモンですかねえ？」

「そんなものよ。…とにかく呼びに行つてあげて、皆に不当な怒りをあらわにした罰よ」

どうやらマイナさんに頭が上がることはないようだ。なんだかんだで一番お姉さんだしなあ…多分一番年上だし

「馬鹿なことと思ってないでとつと呼んできてちょうだい。ちなみに言っておくけど私はまだ高校生2年よ？ちなみに最年長はあなた、お兄さんなんだからしっかりしてよ？」

ホント読唇術でも使えるのかなこの人は…そうか、年下だったのか……じゃねえ！！余計なこと考えないで他の住民を呼びに駆けずり



それでも龍ですから（後書き）

普段怒らない人が怒ると、な〜ンであんなに怖いんですかねえ…？

## 昨日の敵は今日の友（前書き）

最近するゲームがありません。暇です。一日中パソコンと向き合っているわけにもいきませんしね。ペントラブ買ったら挿絵でも投稿しようかと思ったりする今日この頃

## 昨日の敵は今日の友

江流駑莊に新しい住民が増えてから数ヶ月が経った。前まであほのように僕の命を狙ってきたヒイロは少しおとなしくなった。どこかのツンツン頭の少年のごとく説教したわけではないが、普段怒らない奴はいったん怒らせると取り返しがつかないということを、ヒイロは身をもつて住民たちに教えたのだった。

「ヒイロ、今夜の晩御飯は貴様が作るんじゃないかったのか？」

「そういえばそうでしたね…何を作りましょうか？」

「魚が安いんで焼き魚、とかいいんじゃないか？」

「そうですね、煮魚にしましょう」

「いえ、い完全シカト総スルーですかチクショウ」

「さて行きますか龍斗サン」

「へいへい」

スーパー

「荘にいるときくらいニツト帽取ればいいんじゃない？」

「唐突だな…無理だ。誰もいないからいえるけど、角が生えてんの僕」

「それは…見てみたい気もしますね。ですが私には角なんか生えなかったのですが…これも個体差…ということでしょうか？」

「僕は植物なんて操れないしな。どれにしろ今の俺たちではこの状況を打開するような策は無い。今は平和に暮らすしかないってことだ」

「嵐の前の静けさ…でなければいいのですが…」

「おつ、チヨコボール発見!!」

「いえーい完全シカト総スルーですか」

不安をかき消すように冗談を言う僕。ヒイロと何とか和解して数ヶ月。同じ境遇のものがいるというだけでだいぶ心境は変わるもの。打ち解けてみればヒイロはとても素直でいい娘だった。命を脅かすような病にかかったとき、人は少なからず狂うものだ。

人外になった自分と対等に向き合ってくれる存在と出会ってから彼女は変わった。悲観しても仕方ない、と割り切ってしまったのだ。僕のように。それ以来、彼女は少しずつ僕に心を開いてくれているようだ。今だからこそこんな冗談を言い合いながら一緒に買い物も出来る。

少なからず、僕は彼女に笑っていてほしいと思っていた。純真な女の子をここまで狂わせる龍化病。キナ臭さの漂う中、僕は誰かを救うために行動を開始した。

「あれ、龍斗サンまた散歩？」

「うん、家事は一通り終わっただし、ずっと家の中に引きこもってると身体がなまってしまふからね。じゃあいつてきます」

「いつてらっしゃーい」

ヒロとの一戦以来、龍化者探知能力というものが開花したらしい。たまに唐突に角が疼きだす。……別に右目が疼くとか言うわけじゃないし決して僕は厨二病なんかじゃないことを一応言っておく。

龍化者同士で共鳴しているような感じた。僕やヒロのほかにも、この町には龍化者が必ずいる。彼らと友好的に繋がりを持てれば今後のことを話し合っていけるはずだ。

「反応は無し……おっかしいな、前来た時はなんか疼いたのに」

今日は空振りだった。内心怖くて仕方なかった。時折自分が自分で

無いような感覚に襲われることがあった。このままではいつ荘の住民に襲い掛かっても不思議ではない。タイムリミットは着実に迫っているようだ。何のタイムリミットかは分からないが。

適当なところに降り立ち、羽を隠すなどの隠蔽工作のあと僕は適当に歩き出した。裏路地に下りたので陰気な空気が肌にまとわりつく。とっとと帰ろうと思った瞬間、その声は聞こえてきた。

昨日の敵は今日の友（後書き）

うつ  
… 右腕が疼く…（筋肉痛的な意味で）

まさかそつちですか（前書き）

夜勤やってるとなかなか小説が進みません…明日は休みなんでちょっと練習できます

まさかそつちですか

適当なところに降り立ち、羽を隠すなどの隠蔽工作のあと僕は適当に歩き出した。裏路地に下りたので陰気な空気が肌にまとわりつく。とつと帰ろうと思った瞬間、その声は聞こえてきた。

「うへへへへへ、上玉じゃねえか！ーてめえらよくやった！ー」

出来ることなら聞きたくなかった。いかにもな雰囲気の下衆臭がするテンプレどおりのセリフ。よくよく耳をすませればさるぐつわをかまされた人のようなうめき声。おそらく被害者だろう。

「苦労したんですぜアニキ？終わったら俺たちにもマワしてくださいよ？」

下賤な笑い声が響いた。

「やれやれ、あんまりこういうことしたくなかったんだけどね。久々に沸点が最高点から降りてこないよ」

「んだこらあ？！」

おい、それ死亡フラグだぞって忠告したかったが、ゴミにする忠告などない。

ドラゴンオーラ  
「龍気迫」

辺りの物質がひとつ残らず震えていた。まるで龍を目の前にしたちっぽけな羽虫のごとく。有機物無機物の関係なく、その場にいたも

の全てが恐怖に慄いた。

「てめえ… ななななにももも」

ここまで言えただけでもかなりの度胸である。

「貴様らがあまりにもチョーシ乗ってるみたいだからちょっと足元のアリを踏み潰す感覚で叩き潰しに来ただけだよ」

そのまま気を失ってしまった下衆共。身体中からあらゆる体液を流しながら、目を見開いたまま動かなくなってしまった。気迫を収めて囚われの人物に近づく。拘束具を全て跡形も無く破壊してから僕はその少年に口を開いた。

「ほら、立ちなよ。災難だったね」

「あ、ありがとうございます…」

「僕もちよつと驚いたよ。まさかこいつらがそっちのケだったとはね。とつとこんなところから離れよう。いるだけで吐き気がもよおしてくる」

「大いに共感します…」

いつもの公園のベンチに座って僕と少年は談笑していた。

「そうか、君はこの近くに住んでるのか」

「はい、コンビニにおやつ買いに行ったら突然拉致されて…」

「挨拶も無しにか。外道にもほどがあるな。そういえば僕も一度そういう経験をしたことがある。もう5年も前の話だけどね」

「えっ… ってことは…」

「ああ違う違う。拉致されたってこと。誘拐事件に遭遇しちゃってさ。気が付いたらどこか知らない土地に倒れてた。もともと孤児だったから搜索願も出されなかったし、何より気になるのは…」

「な… なんですか？」

「誘拐犯が何も僕にしなかったことだ。拉致されて、気がついたときにはほっぽりだされてた。孤児って知って金づるにならなかったからかもしれないけどね」

「よかったじゃないですか。そこであなたが生きていないと今俺はあなたに助けられることは無かっただろうし」

「釈然としない言い方だな」

「そついやあんたとは仲良くなれそうだ。俺の名前は黄泉川<sup>よみ</sup>。黄泉川<sup>かわ</sup> 堺人<sup>かいと</sup>。この近くの高原高校の2年生だ」

「僕は赤羽龍斗。この近くの江流警荘の専属ハウスキーパーだ。よ

ろしくな、堺人」

二人は持っていたオレンジジュースとカフェオレで乾杯を交わす。

「じゃあな、堺人」

「さいなら、龍斗さん」

二人が帰路に着いたころ、辺りは夕焼けで真っ赤に染まっていた。二人の影の形が若干人のそれではないことを気づけるのは読者くらいだろう。本人たちも気づいてはいないのだから。

次の日。

「じゃあ私達は学校へ行ってきます」

「知らない女の人に付いて行っちゃダメよ、龍斗さん？」

「行つてらっしゃい」

軽く流して二人を見送る。春沙は部活があるとかで、ヒイロは学級委員の仕事。5時起きとかがんばってるなあとか思いつつ二人の朝食の後片付けに取り掛かる。

ここに住んでいる皆が快適に暮らせるようにがんばる、それが僕に

与えられた仕事である。

「……………」

「うぉぁぁ?! いつの間に後ろに居たんですかマイナさん?!」

そこには生気のない目でぼんやりと佇むマイナさんがいた。最近、神出鬼没がデフォルトで備わるようになったマイナさんである。ヒイロが一度びっくりしすぎて腰を抜かしてしまったことがある。ヒイロの黒歴史である。

「……………」

「?…マイナさん?」

「…zzzz」

「(寝てる……?!)」

鼻ちようちゃんが息遣いにあわせて膨れたりしぼんだりしている。女の子としてそれはまずいんじゃないか? とりあえず爪楊枝で鼻ちようちゃんを割ってみる。

パン!!

「!!…zzzz」

「起きろ……!!」

朝から騒がしい。嫌いじゃない騒がしさだった。

まさかそつちですか（後書き）

そついや他の住民は？とか聞かないでください

## 龍化能力（ドラゴンスキル）（前書き）

モンハンとコラボするなら龍斗くん装備は体術、回復速度up、狩人スキルとかついてそうですねww

## 龍化能力（ドラゴンスキル）

家事も一通り終わる。少し落着いたところで外出、前回ヒロと戦った裏路地の広場に向かう。

「（前回堺人と出会った時に出たオーラは何だったんだろうか？…ドラゴンオーラなんて厨2臭いセリフも無意識のうちに吐いてたもんだし……推測できるのは、僕にはまだ眠っている力があるということだ。怒りなどの感情の変化に伴って偶発的に隠されていた能力の片鱗が出てしまったということか）」

冷静に分析をしながら自分を見極める。この先ヒロのような特殊能力者と戦うこともあるだろう。相手が前のヒロのように狂気に支配されているとしたら、一旦話を聞いてくれる状態まで持つていくしかない。そのためには皮肉にも相手以上の力を持っていることが大前提だ。戦わずして、ではなく拳で分かり合えということである。

「皮肉極まりないよなあ……」

指の部分がないグローブをはずす。「ういっしゅー！」とか言うて

た歌手がつけてたようなやつだ。もちろんかつこつけるためではない。手の甲にある鱗の隠蔽用である。こんなものつけてる時点でかなり黒歴史だ。…どこかの少年のごとく。…不幸だ…

「さつて、能力開発に勤しみましょうか」

拳に力をこめる。すると鱗が前にせり出し、一センチほどの刺になった。メリケンサックに刺が付いている感じた。強度はそれなり。前に鱗を包丁で切ろうとしてみたが、包丁が欠けてしまった。焦って苦し紛れに鱗で包丁を研いでみたら、日本刀レベルの切れ味にまでなってしまった。危険すぎるので今は僕の部屋の押入れの中に大切なものと共に封印してある。

おかげでもう一本包丁を買わなければならなかった。…大切なものという単語にわざわざ過敏に反応しないでくれ。話を進めるよ？

力をこめた拳を地面に突き立てる。軽い力なのに、半径3メートル弱にひびが入った。そして殴ったと同時に拳の頭から火花が飛び散る。拳を突き立てた場所が黒焦げになっている。

どうやら感情の入れ具合によって熱をもつようだ。1リッター程度の水なら一瞬で蒸発させることが出来るのではないかと思った。

「僕自身は全然熱くないな。拳から湯気が出てるってなんかシュー

ルだ……なんか刺の辺りがムズムズする……」

刺と皮膚の間をかいた次の瞬間刺の一本がポロリと落ちた。

「あ、とれちった……」

刺が地面に落ちる。

「あ、やばい」

直感的に思った。なぜなら落ちた刺が急速に光りだしたから。

ドカーーーーーン!!!!!!!!!!

街角の一角ですさまじい地響きと大量の煙が上がった。砂が雨のよう  
うにその辺に降り注ぐ

「…………ケホ……」

すさまじい爆発が起きた。反射的にバックステップして距離をとったので何とか助かった。それでも前髪の一部が焦げ、服も若干焼け焦げてしまったが。身体能力って大事。いやほんと。

「危険極まりねえな…もつと本気出せばターミネーターの電池が爆発したときみたくなりそうだ…最後の手段ってどこか」

感情を落着けんとすると引っ込んでいく鱗。騒ぎが起きないうちにとっとと退散することにする。

## 龍化能力（ドラゴンスキル）（後書き）

ちなみにオープニングテーマはAcid Black Cherry  
で「DRAGON CARNIVAL」ですww

## 暴走の業火龍（前書き）

龍、集いしとき。世界は業火に包まれ、暗黒が命の理を喰らい尽くし、光は全ての罪を焼き尽くす…水はあらゆる生命を飲み込み、大地は自らの中へと命を引きずり落とす。

風は刃となりて神を切り捨て、緑は抗いし者に苦しみを与える。

7つの災厄を従えし皇は全てを原始に戻したとき、厄災を自らの中へと取り込み、刻をも葬り去り、終末をもたらす…

## 暴走の業火龍

「ただいま…あれ？」

居間の机の上に置手紙。住民が何か買ってきてほしいものでも書き残したのだろうか。どれどれ…

（ヒイロは預かった。返してほしければお前とヒイロが戦った場所  
に來い P S 俺は例の病の発症者だ）

そのとき、僕の頭の中で何かがぶち切れた。

「f ; @ : . l k h k v t h k s d v h s t . @ : ¥ g k d s ! !  
! ! ! !」

莊のドアをぶち破らん勢いでドアを開ける。巻き込んでしまった。  
僕一人ならともかく。何の罪もないこの莊の住民を。龍化病と真正  
面から向き合おうとしていたヒイロを。絶望の底からやつと光が射  
した一人の少女を。また血なまぐさい戦いの輪の中に巻き込んでし  
まった。

人目もはばからず、（幸運にも誰もいなかったが）僕はジャケット  
を抜き捨て、羽を広げて再びあの場所に向かう。

「ガッアアアアアア！！！」

「？！なんだ？！」

隕石が衝突する勢いのごとく僕は全力で空き地に突っ込んだ。怒りが抑えきれそうにない。そこに居た人物を見て更に僕の怒りのボルテージは上がった。

「まさかテメエが犯人だったとはなア！！黄泉川堺人！！」

「あゝちよつとばつかしやりすぎたかなあ…とりあえず落着こうよ龍斗さん…」

困ったように頭をかく堺人

「答えは聞いちゃいねえええ！！よくもヒイロを戦いに巻き込んでくれやがったなあ！あいつがどんなに悩んでいたかも知らねえでえ！！！！！！」

怒りに呼応し角が熱気を帯びる。身体中が戦闘用に研ぎ澄まされていくようだ。拳の棘は10センチほどにまでなった。靴の先を破って太く荒々しい爪が出てくる。顔の一部にまで鱗が出てくる。

犬歯が1・5倍ほどにまで伸びる。吐き出す吐息に火花が出始める。

「いやだからはなせばわか…」

「龍の怒り（アングラー・オブ・ドラゴン）！！」

突き出した拳からものすごい殺気が堺人を討ち滅ぼそうと発射される。弾道の地面にヒビが入っていく

「チックシヨ、やるしかねえのか…ドラゴンサイズ龍鎌・ジャグラヴィーン！！」

堺人が空間に手をつ突っ込む。虚空を掴むはずだったその手は一瞬どこかに消える。しかし次の瞬間禍々しい姿をした死神の大鎌デスサイズを空間から引きずり出した。

同時に堺人の腕や顔の一部が漆黒の鱗に覆われていく。背中から夜の闇よりも黒い翼が姿を現した。闇に溶け込むその片翼はまるで形のない煙のように揺らめいている。

「シャドウ・ウォール黒影の城壁！！」

翼で防御する堺人。殺気の塊が翼に当たると空間が僅かに震えた。僕自身も爆風で怯んでしまった。堺人もどうやらそうらしい。

「俺以外の龍化者と始めて戦ったけど、やっぱりただモンじゃなかったよ、龍斗サン…」

「グルルルルル…」

おかしい。感情が抑えきれない。最初話し合いで勝負をつけようと

考えていた僕だったが、どんどん理性が削り取られていく。何も考えられない。ただ、目の前の敵を討ち滅ぼすためだけに身体が動く。殺せ殺せ殺せ殺せ…ヤメロヤメロヤメロ…

「あああああつぐがああああつあああ！！！！！！！」

「龍斗？！」

最早何も考えることができない。頭が真っ白になる。そのとき…

スタンフランド  
「麻痺植物！！」

「あふん」

僕のケツに痛みが走る。なにかが噛み付いているようだ。振り返るとそこには囚われているはずのヒイロが居た。そして僕のケツにはハエトリソウみたいなものが噛み付いていた。そして噛まれたところからどんどん痺れて動けなくなってくる。頭の先までその感覚が行き着いたとき、僕は力なく倒れた。たまに何故か痙攣する。ぴくぴく…シビシビ…

## 暴走の業火龍（後書き）

前書きにそれっぽいことを書いてみました。伏線っぽくしてみましたけどどうでしょうか？

## 忍び寄る影（前書き）

世界の狭間で出来事。形容し難いその物たちは考えた。

「このどうしようもなく歪んだ世界は一度滅びなければならない」

「ならばどうする？」

「龍を解き放つ」

ただただ淡々と滅びを執行しようとする物達。龍となりし者達はどう動くのだろうか。

滅びの期限は、着実に。近づいてきている

## 忍び寄る影

「私にも探知能力はありますよ。龍斗サンと違ってあまり発達はしていませんがね。それより…」

今僕と堺人は江流警荘に戻ってきている。そして僕たち3人意外誰もいない居間で、ヒイロから説教を受けているところだ。

「黄泉川も黄泉川よ。こんな手紙おいといたら誰だつて勘違いするに決まってるわよ！頭おかしいんじゃないの？！」

怒りのあまり口調まで変わっている。居間の彼女は龍ではなく鬼にしか見えなかった。

「ハイ…返す言葉もありません…」

あまりの迫力にただただ萎縮する黄泉川。助け舟を出すわけではないが、そこで僕は気になっていたことを質問する。

「そういえば二人は知り合いなんか？初対面ではなさそうな雰囲気だけど」

「ハア…クラスメイトですよ。真に遺憾ながら。そして私のことも気づいていたようです。龍化者探知能力は龍斗サンよりも優れているようです」

「ひでえ…まあ半径4キロ位なら大雑把だけど分かるよ。ただ範囲は広けれど詳細情報まではわかんないけど」

個性豊かな、という感じなのだろうか。龍化者にも本当にいろいろなものがある。まだ3人しか出会っていないが。

「なるほどな。そうだ、二人は今落着いているか？時々理性が振り切れてしまいそうにならないか？」

「どうのことです？」

「さっき僕は理性が完全に振り切れてた。自分で感情をコントロールできなかつたんだ。ヒイロが来てくれてなかつたら多分この街は焦土になってただろうと思う……」

自分自身の力の度合いはよく分からないが、少なくとも都市一つ灰にできる自信はあった。しようとも思わないし、自慢にもならないのだが。

「怖え…確かに、あのときの龍斗サンはなんか獣じみてた。なんかおかしいなとは思ってたけど…今んとこ俺は大丈夫」

「それが私達にも適用されるなら…これは由々しき事態ですね…私も大丈夫ですが……」

「龍化者が3人も集まつたんだ。よくよく考えれば何か起こらないほうがおかしいよな」

そつだ。人外が集まるときは大概何か大きな戦いの直前だったりする。

「一応確認しとくけど…黄泉川は敵意はないのか？」

「敵意があつたらとつくの昔に血まみれになつてゐるよ……どっちもだろうけど」

「3人目の龍化者か… なにかいやな予感がするな…」

彼らの危惧は現実のものとなるのだろうか。天のみぞ知ることである。天気が急に悪くなり出した。ゴロゴロと不吉な雷の音が、そう告げていた。

ここはどこか。形容し難い空間の中だ。言葉で言い表せない空間の中、二人の人らしき物が言葉を交わしていた。

「龍は何匹集つたのだ？」

「現在5匹が接触、残り4匹が個々に活動しています」

「そうか。何もないのも面白くはない。こちらで少し茶々を入れてみようか…フフフ」

空間が歪む。人のようなものの狂気に反応しているように。

「雷龍を動かせ！」

忍ぶどころかやつかいに（前書き）

「龍化者の男女比率が圧倒的に女性に多いのはあなたの仕業ですか？」

「な…なんのことかねえ…」

異空間に若干不穏な空気が漂う。

## 忍ぶどころかやつかいに

「どれにしろ今日ここで新たな同士が見つかったというのは決してマイナスではない。むしろいいことだ。人脈はどれだけあっても困らないかなね」

「早い話、うれしかったんですよ？もう少し言い方というものを考えたほうがいいかと思いますよ」

「俗に言うツンデレーション、ということかwww」

「今日のご飯は麻婆豆腐だったんだが、少し買いすぎてしまったな。もう一人分くらいの余裕があったんだが、そうか。それは別の人の胃袋に収まることになりそうだね？堺人？」

「マジすんませんでした本気で誤りますからご馳走してくれるとうれしいですハイ」

プライドもへったくれもない混じりっ気なしのガチ土下座。本当に悪いやつではないらしい。それにちょっとホッとしつつ、また今日もキッチンという戦場へ向かう。

キッチンで調理していると、外からぽつぽつという音がする。そういえば居間にいたときもゴロゴロといていたし、今夜辺りは激しい雨でも降るのだろうか。停電にならないといいけど。と思った数

秒後、ドジャー――！！と文字通りバケツをひっくり返したような大雨。局地的豪雨という言葉がよく似合う。ゲリラ豪雨、でもいいかもしれない。

更にドンガラガッシャーーン！！という凄まじい音。近くに雷でも落ちたのだろうか。一瞬部屋の電気が消え、数秒後に復帰した。

僕もちょっとびっくりしてしまっただが、居間のほうできゃー！！という悲鳴と共にバキィ！！という誰かが殴られたような音。堺人がどさくさにまぎれてセクハラでもしたのだろうか。

調理もひと段落し、少し煮込む工程に移行したとき、ガラガラと玄関の引戸が開けられる音がした。火の用心。コンロの火を消してから、風呂場からタオルを取ってきて出迎えに行く。午前中晴れてたし、住民のほとんどは傘持って行っていないはず。風呂の準備は万端だ。

「おかえりなさい……ってその人は？マイナさん？」

玄関に立っていたのはずぶ濡れになったマイナさんと謎の少女。マイナさんの背中におんぶされる形である。苦しそうな息遣いが聞こえてくる。見るからに調子が悪そうだ。

「この娘ね。その辺で倒れてたのよ。早急に手当てが必要ね。手伝ってくれる？龍斗サン」

「心得た。ずぶ濡れになって帰ってくるかもしれないから、風呂も入れておいた。先にそっちに入ってもらうか？」

「そうね、私が付き添うから。他に誰か女の子はいるの？」

「ヒロがいるな」

「じゃあヒロちゃんの服を貸してもらって、なんか後温まる消化のよい美味しいもの、お願いできる？」

「問題ない。行動開始！」キリッ

「まずはそのタオルを貸してもらえるかしら？」

「ああ、ゴメンゴメン…」

江瑠磐荘2階の廊下・ヒロの部屋の前

「ハイ、私の服です。…大丈夫でしょうか、その娘…」

「大丈夫だ。さっき風呂の前を通りがかったとき、なにか会話して

いるようだったよ。それくらいの体力は戻ったんだろう」

「まさか…龍斗サン…」

「ちがう。断じて違う」

「ふうん…そうならいいんですけどお…？」

「さて、そろそろ冷凍うどんが解凍できてるころだろ。…卵は溶いたほうがいいか…割り入れたほうがいいのか…」

「溶き卵のほうがいいと思いますよ。うどんにも絡まりやすそうですし」

「分かった。お前らの飯はもうちょっと待ってくれな」

「はいはい」

そのとき僕は知らなかったんだ。こんな結末を導くことになるうとは。もし過去の僕に直面して会話が出来るというなら…全力で…

比較的しなくなかった再会（前書き）

「……なんか仲良くなっちゃってますが…？」

「……………大丈夫だ、問題ない」ダラダラ

「冷や汗で服がびちゃびちゃですよ？」

比較的しなくなかった再会

「さて、うどんも煮えたし後はあいつらの飯を温めて……」

「あ、あの……」

後ろから声がする。…さっきも思ったが、不思議なデジャヴを感じる。どこかで聞いたような声だ。誰だったっけ？

「た、助けていただいた上、お食事まで……っ、ありがとございませす!!」

どこだろうか…そして何故か嫌な予感が脳内を駆け巡ってるんだが…なんていうか…トラウマって言うのか？

「し、初対面の女性に対して無視はひどいと思います！」

「ああ、ゴメンゴメン、ちよつと考え事してたもんでって……あ……」

おっと、軽いトランス状態に陥っていたようだ。さすがに失礼だったな。振り向いて弁解の余地を、とさっきまで思ってたんだけど……

「あ――――！！！！！」

「ウソだ…ありえない…何でここにチャクラが居るんだよ…」

「わちの名前は茶倉ちぐらだ———!!」

「……そうだったの…」

ところと時間変わってここは居間だ。今現在居る住民と茶倉で食卓を囲んでいる。茶倉といえば、うどんどころでは済まず、普通にご飯も食べているところだ。よほど飢えていたらしい。

ほのかに金色のセミロングの髪。身長は150前半。丸顔でどこか幼さの残る、利発そうな顔立ちだ。

茶倉がここまで来た理由をいきさつを簡単に要約すると、ある日突如僕が失踪した噂を聞いて、自分も脱出しようと思ったんだそうだ。確かに、あの児童養護施設はお世辞にもいい環境とは言えなかった。最低限の生活しか出来ないような、何一つ喜びを感じることができないような施設だったからだ。僕がバイトへ行けていたのは隠れてこそそそ通っていたからである。厳しいわけではなく、ザル同然の

警備の目を盗むことは7歳のころの僕でも出来た。

「それでこの辺りに行き倒れてたつてことか。聞いた場所からだところまで結構距離あるぞ？よくここまでこれたな」

堺人が爪楊枝でシーシーしながら喋る。マナー違反だろうが自重しやがれこのバ堺人

「公園の水と試食で食いつないできた。わちの通った後には試食と  
いう試食が消えたな」

フンス、と誇らしげにない胸を張る茶倉。一応言っておくが、誇れる要素は一つもない

「茶倉ちゃんはいくつなの？中学生くらいかな？学校はどうするの？」

「その質問はダウトだヒロ！」

「わちは19歳だ――――！！！！あとチャクラじゃなくてサクラだ――――！！！！」

「ええええ――！！！！？！？？」

? ? ? 「」

「驚きすぎだ、チャクラが泣いてしまうじゃないか」

「ぐすっ……どうせわちは合法ロリですよ……ひぐっ……」

「いやその発想はおかしい」

「数え年で19ってただけだろ？実際は18、今年で卒業だったんだから別にあのまま居てもよかったんじゃないか？」

「……………あ」

「（ああ、この人アホの子なんだ…）」

「哀れむような目で見るんじゃない。どれにしろあんなところ、長くは居たくはなかったさ。堪忍袋の尾が切れた、ってだけだよ」

お茶をすすりながらのんびり離すチャクラ。もうなじんでやがる

「ん、こんな時間か。俺はもう帰るよ。長々とお世話になったな、龍斗サンに皆さん」

「ん、このくらいならいつでも来ていいぞ」

「ここがアウターヘイヴンか…」ホクホクニヤニヤ

「訂正。もう二度と来るな」

「ちよっ…まじで…」

堺人の襟首掴んで荷物ごと玄関からぼっぼり出す。

ガラガラピシャー——ン——！

くバ————カ——！！！！！！ガチャリ

カギまでかけられた。

「ひでえ……もしかして俺、ずっとこんな役回り？」

不憫である。

比較的しなくなかった再会（後書き）

感想ください。

作者と兎はね？寂しいと死んじゃうんだよ？  
W  
W  
W  
W  
W

## 江瑠弩荘怪談記（前書き）

もつそろそろその季節になってまいりました。まあ小生は嫌いなんですけどね、ブルブル…

## 江瑠弩荘怪談記

「とりあえず泊っていきなよ、この辺にビジネスホテルとかないし。女の子が夜道に一人とか物騒すぎるし」

「同意だな。開いてる部屋ありますか？大家さん」

「あるっちゃあるよ。でも…」

「でも？」

僕以外の全員が息を呑む。

「まさかあの部屋ですか？！大家さん？！」

「そう…あの部屋よ」

「なんですか？あの部屋って」

一瞬停電になってまた明かりがついた。なんかおどろおどろしい雰囲気になってきたな…

「この江瑠弩荘にはね…禁じられた部屋があるの…」

マイナさんがゆっくりと語りだした。

「2階の奥にある部屋なんだけどね…そこには今の大家さんよりずっと前の時代に、なにか事件があったらしいのよ。この江瑠警荘は築50年。そう、丁度50年前に事件は起こったらしいわ…」

またしても電気が消える。部屋のあちこちからパニックの悲鳴が上がる。数分後、僕が棚からろうそくを取り出し、そっと吐息で火をつけた。暗闇だからばれないだろう。火って便利だわ。そしてまたマイナさんは語りだした。…あれ？なんか怪談的な雰囲気MAXじゃないか…遅ればせながら、僕も少しゾクツと来た。

「まだ新築だったこの江瑠警荘に、ある女が尋ねてきたらしいのよ。土砂降りの雨の中。ずぶ濡れの女はこういったわ。「長旅の途中で雨に降られた、落着くまでここに居させてほしい」と。当時の大家さん…彩音さんのおばあさんになるのかしら。快くその人を受け入れたの…そしてその晩…」

ガラガラガッシャー…！！

近くに雷が落ちた。いつの間にかマイナさんを除く全員が僕の周りにしがみついていた。…ぶっちゃけて言うと僕も正直怖かったのぢよっと安心できたりしている自分も居た。

「その女は風呂にも入らず、ただ大家さんが用意してくれた部屋にずっと引きこもっていたらしいわ…食事もとらずに。心配した大家

さんが部屋のドアを叩いても何の反応もないの。心配になった大家さんは合鍵を使って部屋に入ったの。窓は開いていて、降っていた雨が振り込んできていたわ…

その女はどこにも居なかった。代わりに部屋にあったのは……大量の鱗と凄惨に飛び散ったどす黒い液体よ。そしてそこにはバラバラになった日本人形が、虚ろな目を窓の方向に向けていたそうよ」

「…液体？まさかそれって…血液？！」

「さあ？次の日にはどこから聞きつけたか、専門の業者だとかいう連中が、その部屋をもとあったようにきれいにして帰って行ったらしいわ」

「なんか知られたくない実験でもやってたのかな…それこそ、人体実験とか…」

「あら？普通ならオカルト的な方向に皆考えるのに、珍しい思考なのね」

「っ…ま、まあ怖いのを紛らわせようとしてただけでさアハハハ…」

心当たりありすぎてちょっとびっくりしてしまった。ヒイロも若干拳動不審である。

「で？それでも泊るというなら…」

「出来れば皆さんの部屋に置かせていただきたいです」

急にしおらしくなった茶倉。そういや怖い話とかめちゃくちや嫌いだっただけ。昔、茶倉と一緒にバイオ・。ザードやったら途中、茶倉が気絶したこともあったか。天井から化けもんが降ってくることで「きゅー…」とかいつて倒れたのを、今でも鮮明に覚えている。初見だったので僕もちよつとびっくりしてしまったりするんだが。

「じゃあ今日は龍斗サンの部屋に泊ってもらおうかしら」

「まさかの僕の部屋?! 何で男の部屋を選択肢に入れるんですか!」

「なぜって…知り合いだから?」

「軽率すぎやしませんかい?」

「怖い話しちゃったし、こういうときは知らない人より知り合いのほうが落着くものよ」

「詭弁じゃありませんか? それ」

「大丈夫。今居る子全員で龍斗サンの部屋で寝るから」

「(うわーいばくしんだ)」

眠れない夜は続く

## 役得？幻想にすぎません（前書き）

作者に実体験はありませんが、多分そういう感じなのでしょう。無駄に理性が働くやつにとっては特に

## 役得？幻想にすぎません

「…ふふんふーんふーんふふーん…まあ知らないんだけどね」

昨日のどちや降りとは打って変わって、今日は晴天洗濯日和である。気分がいいので鼻歌を歌いながらの家事である。昨日の夜は大変だった。ゴロゴロという音がする度キヤアアという悲鳴がしたからだ。眠れるとかそういうレベルではない。朝起きたとき、妙に暑いと思ったら、全員が僕の布団にもぐりこんでいていたのである。正直ヤバかった。多少耐性をつけていておいてよかった。男の子なら…分かるだろう？

「おふあようー龍斗サン…」

「あ、お目覚めか？おはよう」

大家さんが寝ぼけ眼をこすりながら、庭で洗濯を干している僕に向かって挨拶をしてきた。もうそろそろ皆が起きだしてくる時間か。朝食の準備をせねばなるまい

「つか、大家さん…パジャマめっちゃめっちゃはだけてますよ、とつとと身支度してきてください目のやり場に困ります」

「えへへーひつさつのうさつおうぎーだきつきー」

雨でぬかるんでいる庭に裸足のままこちらに歩み寄り、抱きついてきた。ダメだこの人完全に寝ぼけてやがる。これ以上君達の想像の翼を羽ばたかせるもなんだ。その…僕の胸部に当たっているのあれ

の感触とか……僕の血圧が上がるその前に……さっきまで水をいじっていたので僕の手はとても冷たい。それすなわち……

ぴとッ

起きぬけの人には大分つらいだろう冷たさの手を大家さんの頬に押し付ける。びつくりして数歩後ずさりする大家さん。

「わひい？！」

「身支度してきてくださいね、大家さん」

よし、効果覲面！と思ったのだが……

「あつためてあげる……ぎゅ……」

僕の手を握ってきました。……どうしましょう。とってもあつたかいです。ハイそこで僕の理性がストップをかける……！

「早く行って身支度してくる……以上……！」

「ふぁ……い……」

少々つまらなさそうに歩き去っていく大家さん。

「ちょっと待って足拭いて足拭いて……廊下が泥だらけになっちゃう……！」

気苦労は絶えない。

「フッフ、大変そうだな赤羽。何故か施設にいたころよりも表情が柔らかいようだな。なるほど、お前も獣<sup>オトコ</sup>だったということか」

「うるせえよチビ。昔から何かといちやもんつけてきやがって、僕に恨みでもあるってのか？それとも最早使い古されたツンデレというやつか？」

「うるさい！！うるさいうるさいっ！！チビって言うな！！それが年上に対する態度かっ！！こうしてやる！！」

殴ろうと庭用のスリッパを履いて（内心ホッとした）僕に殴りかかってくる。対処は簡単。

頭を抑えればおのずとその他の部分もそれ以上前には出ない。ムンズ、と頭を掴もうと手を出す。

「甘い！！見切った！！」

頭を下げ、低姿勢で僕の真横に潜りこもうとした。した、ということとは出来なかったということ。横に回りこもうと進めた足先をちょっと引っ掛けてやる。

「うわひっ？！」

ヘンな悲鳴だ。どれにしる洗濯物は増やしたくないので襟首掴んで落下を阻止、そのまま持ち上げ、スリッパを脱がせ、反動をつけて部屋の中へと放り込む。

「ぬおりやああ！！」

「ああ~~~~」

ズシャアアアというすごい摩擦を表すのに便利な効果音と共に、居間の畳の上をスライディングする茶倉。ヤベ、ちよつとやりすぎたか。畳、傷まないかなあ…

「わちの心配をしろ！！わちの心配を！」

やれやれ、朝からやかましいのは昔から変わらない。ちよつとした懐かしさを覚えた。

役得？幻想にすぎません（後書き）

ほのぼのいちゃラブばっかです。そろそろバトルパート入らないと  
…

## 雷光の支配者（前書き）

ドラゴノイドの更新が滞ってしまったのには訳がありまして…他に  
書いてる小説のほうばっか進めてたらこうなってしまうましたw w  
すみません…

## 雷光の支配者

気が付いたら僕はあの空き地にいた。比較的都会に近い町なので、こついつた空き地はそれほどないのだ。なのでよくこの空き地が使われる。そうだ、掃除したらビリッて来てなんか意識失ったんだっけ…

「ッ……ヒリヒリする…何が起こったってんだよ…」

「お目覚めか？赤羽龍斗」

聞き覚えのある声。というか今朝ブン投げた茶倉の声である。だがその声には抑揚がなく、感情のない人形を連想させた。

「いたずらにしちゃオイタが過ぎるな、茶倉。お前が僕をここまで運んでこれたなんて、正直驚いているよ」

「何を言っている。お前も良くわかってるはずだ。この病について」

そんな…まさか…

「そうだ、わたしは龍化者、雷龍だ。この戦いを終わらせるため、貴様ら龍化者を殺しに来た。まずは貴様からだ。感電死するがいい」

さっきまで晴れていた空がどんどん暗くなり、上空に雷雲が発生する。この町全体を覆うほどの雲だ。もしや…あのときのスコールはこいつが?!

「察しがいいな。雷を意図的に発生する雷雲を発生させ、この世に存在する電化エネルギーを意のままに操る。それが!私の龍化能力<sup>ドラゴンスキル</sup>だ」

凄まじい速さで迫り、僕に拳を振るう茶倉。早い。だが、避けられないことはない!飛ばしてきた拳を後ろへ受け流せるように構えを取る。

「貴様の動きも私に筒抜けだ」

直前で拳を開き、僕の腕を掴み、そのまま後ろへ投げ、地面に叩きつける。

「かはっ…?!」

肺から空気が抜ける。ミシミシと背骨が悲鳴を上げる。叩きつけら

れた地面に大きなヒビが入る。

「爆雷！！」

茶倉はバックステップで回避、と同時に頭上の雷雲から雷が落ちてきた。やるしかない。

「うおおおおおおお！！！！」

拳に気を込める。目の前の雷を打ち滅ぼすために。

「龍の怒り（アングー・オブ・ドラゴン）！！」

凄まじい爆発が起きた。

「う、ごほっ…茶倉…」

正直キツツイ…さっきの攻撃を打ち消すのに大分気力を使った。後何発撃てるか…後何発で茶倉を戦闘不能に出来る？そしてなにより…気力が減るたびに、あの凶暴な龍の魂が鎌首をもたげる。茶倉を倒すまでに正気でいられるのか…？

「ほう…伊達に龍化者をやっているわけではないようだな」

「くそが…なんで…マジもうクソツタレが!! やってやろうじゃないかねえか!!」

立ち上がり、拳を付き合わせ、精神を集中する。家事をしていたので上着をしていなかったのが幸いだった。破るもつたいないし。Tシャツを突き破って翼を大きく展開する

「こっからは本気だ…後悔するんじゃないぞ…?」

「おもしろい…」

雷雲から降り出した周りの雨が、僕に触れる前にどんどん蒸発していく。堺人と戦ったときのように、身体が戦闘用に研ぎ澄まされる。覚悟は出来た。相手を倒す覚悟と、相手に倒される覚悟を。

「いざ…!」

踏ん張る足に力を込め、一瞬のうちに茶倉の背面にもぐりこむ。

「無駄だ。地雷」

地面からの放電。しかも、確実に僕の足の裏を捉えていた。全身を貫くような衝撃が僕を襲う。雷龍とか言ってた時点で気づくべきだった。

「そう、私はあらゆる雷を操り、観測できる。貴様の人体を動かしているものも、生体電流と呼ばれる電気というわけだ」

これもう詰んだんじゃないか？そう思わないでもない僕だった。幸いダメージは低く、すぐに立ち上がったが…反撃の機会を与えてくれない。

「そろそろどうした？万雷」

空からそれこそ雨霰のように雷が降り注ぐ。着弾した雷が地面にどンドン焦げ後を作っていく。走馬灯だろうか。そういえば…こいつと出会った日は。今日とは違って晴天だったのに。

哀しかった。辛かった。なぜ自分が存在しているのかが分からなかった。誰ともなじめないわけでもなかったが、誰かと一緒にいても自分の心に浮かぶのは虚無感だけだった。

孤独が辛かった。一人が辛かった。いつも自分の部屋に閉じこもって部屋の隅で泣いていた。いよいよ辛くなったとき、僕は自殺を試みた。最初のほうに言ったと思うが、僕の部屋は三階だ。鉄格子の縦棒一本が脆く、当時10歳以下の僕の力でも取ることはできた。そして…

僕は飛び降りた。

僕は生きていた。下の階のベランダの鉄格子に引っかかったのだ。何のイタズラか、そこが茶倉の部屋だった。

彼女は驚いた。突如上から人が降ってきたのだから。しかし彼女はどうするわけでもなく、僕を部屋に引き入れ、泣きじゃくる僕を優しく抱きしめてくれていた。ああ、だからか。大家さんに抱きしめられたとき、どうしようもなく涙が流れたのは。

「不快なことを思い出しているようだな…」

読心術？いや、生体電流が云々とか言ってた。脳内は微弱な電気の伝達で命令を飛ばしたりしていると聞いたことがある。記憶まで読めるのか？

「そうだ。そろそろオイタが過ぎたようだ。とつとと死ぬがいい、赤羽龍斗」

「いや、死ぬのは貴様だ。雷龍。茶倉を返してもらおうか」

「ほざけ！！」

再び雷を落としてくる雷龍。覚悟は決まった。たとえ僕が死のうとも茶倉を取り戻してから死ぬと。拳に力を込めた。

## 茶倉としての想い（前書き）

バトル描写が心底ヘツタクソだと思う今日この頃。刀馬鹿さんのようには行きませんねえ…

## 茶倉としての想い

ドラゴンオーラ  
「龍気迫！！！」

気迫の塊を自分の周りに展開する。一応、360度対応できるが、いかんせん効果は低い。強めの攻撃なら一瞬で割れてしまいそうなくらいだ。そして強く翼で羽ばたき、空気を後ろに投げつけるように、ロケットのような勢いで突進する

「そんなシャボン玉で何とかなると思っているのか！！万雷・タケミカツチ！！！」

頭上の雷雲から空を埋め尽くさんばかりの雷が落ちてくる。気迫の膜が破れないように割れそうになつては補強を繰り返す。ジグザグに走りながら土煙を巻き上げ、雷龍の視界を邪魔する

「どうかな！！！」

思ったとおりだ。こいつは雷を自分の身体に纏わせることは出来ならしい。つまり遠距離特化であり近接は苦手ということだ。それが穴となる。

ブラストナックル  
「業火拳！！！」

「な…?!」

龍気迫によつて生体電流感知能力をごまかし、かつスピードを加えることで雷龍の不意を付いた。僕の拳が雷龍の顎にクリーンヒット。と同時に拳に封じ込めていた炎を一気に爆裂させる。やつの脳を激しく揺さぶる。同時に襲い来る業火。

「アナタは誰？」

「わちはお前だ」

あたり一面真っ白だ。というか何も無い。そこにいるのは同じ身体に居座る二つの魂のみ。

「わたしはあなた？」

「お前はわちの大事な人を傷つけた。許されることではないぞ?」

「そうですね…言い訳もしようとも思いませんが…アナタの、想い人でしたっけ?」

直球の問いかけに茶倉は動揺を隠せない。それはそうだろう、同じ身体ということは記憶もお互いに筒抜けなのだ。ここで嘘についても不毛というものだろう。

茶倉が龍化者となったとき、彼女の中にもうひとつの人格が生まれた。と言っても龍としての本能がもうひとつの人格となって具現化したものだ。なので人格とう言い方もいささか違和感があるのだが。

「うつ…そうだ。それだけではない。お前の目的は龍化者の殲滅、そしてそれに伴う何かの大きな変動。大いなる何かの…いや、わちや龍斗をこんな体にした、心底腐った連中が動き出す。お前はそれで満足するかも知れんが、そのために多くの人を殺すのは!心底わちは気に入らん!!」

「戦いに犠牲は付き物です。私も彼らが何をするのかはわかりませんが、とても恐ろしいやつらということは言えますね。残念ながら…私達はここで脱落のようです…脱落してしまいましたので奴らの

事ももうどうだっていいのですが」

「何をほざいてる？目を開けて見る」

「？」

ほの暗い部屋の中だ。暖かい布団に包まっている感覚がある。隣で何か寝息を立てている。先ほど殺すはずだった赤羽龍斗その人が壁にもたれ、あぐらを掻き、腕組みをし、鼻から鼻ちようちんを出し入れしながら、ぐっすりと眠っていた。それが表すことはただ一つ。

「生きて…いるのですか？私達は…」

「違う。生かされたんだ。慈悲をかけられた。戦うものとしては最もされたくない行為だろう。だがあいつの考えはわちらと大きく違う。あいつの中では、わちらを凌駕した時点で、既に護るべき対象と捉えたんだろう。わちらより強いあいつはわちらに生きること強制したんだ。強者の特権というやつなのかな」

「護るべき…対象？」

「感情論に関しては無知だな。さてと。そろそろわちは起きる。お

前はおとなしくわちの尻に敷かれていればいい」

「解りました。あなたの言葉の意味を考えながら、少しの間眠らせてもらいます。それでは、お幸せに。今ならチャンスですよ？」

「なっ……／／／／／」

徐々に光が収まり、目の前が先ほど見たほの暗い場所に切り替わる。

龍斗が起きないように、静かに。布団から上半身を起こし、素直な自分の気持ちを言葉にする。龍斗が起きているときなら絶対にいうことのない言葉。

「ありがとう。龍斗」

「ン……」

少し満足げな表情で眠り続ける龍斗。その姿があまりに無防備なので、イタズラ心が疼く。

「いや、まてまて。変態じゃあるまいし。それはさすがに卑怯だ。……ちよつと位なら……」

布団からゆっくり這い出し、両手と両膝を付いた、いわゆるハイハイの状態で眠っている龍斗にゆっくり近づく。起こさないように、起こさないように。そーっと。そーっと。

「大好きだよ、龍斗……」

自分の胸に秘めたる思いをその一言に乘せて。龍斗の唇に己のそれが近づく。恥ずかしいので目をつぶる。あと何センチだろうか。龍斗の体温が近くなっていくのがわかる…ふと、龍斗の吐息が茶倉の肌をくすぐった……

「ぶえつくしよい！！！！グズツ……ん？起きたのかチャクラ」

「……………」

顔面に、モロである。しかもくしゃみのショックで起きる始末。これがおチ。

「ああかばねりゅうとおおおーーーー！！！！」

「え？いやちょっとま…ぎゃあああああああ？！？！」

その日また雷が落ちたそうだ。

茶倉としての想い（後書き）

どう？それっぽく見た？…そう。泣いてなんかいないもん…w w

特務機関・龍殺し（前書き）

いよいよそれっぽい戦闘シーンに挑戦するよ！！マジでアドバイスが欲しいですハイ

## 特務機関・龍殺し

公園にその男はいた。全身黒いコートに黒い帽子、サングラス。この時代にこんな格好。必然的に注目の的になる。だが男はそれをなんとも思っていないらしい。しばらくその辺を歩き、公園のベンチを見つけ、腰掛けると、帽子を脱いでこう一言。

「クッソあちいなぁ〜…何でこつも暑いんだよ…」

お前のその格好のせいだ。帽子を団扇のように扇いでいる。晴天、その格好では体感温度は炎天下にもなるだろう。倒れたりしないよな？そのとき、男の懷から携帯電話の着信音4が流れ出す。めんどくさそうな様子で電話にでる男。いくつかの言葉を交わし、携帯を切る

「さ〜て、お仕事お仕事」

再び帽子を被り、携帯をしまい、ゆっくりと立ち上がる。気だるさそうに彼は手元のメモに目を通す。

「いけ好かないねえ…自分でも思うよ。なあんでこんなところに所属してんだろうなあ…とっとと自由の身になりたいもんだ」

サングラスの奥に虚無感を滲ませながら、男は立ち去った。

最近茶倉の僕に対する態度がおかしい。絡み方に力技が混ぜられ始めている。いきなり後ろから背中思い切りビンタとか、ドロップキックとか、クロスチョップとか。そのせいで僕の感覚は人よりかなり研ぎ澄まされたと思う。

後ろに誰がいるか分かるようになってしまった。普通の人なら死んでような一撃を執拗に放ってくるのだから、僕だって対応しなければならんだろう。今現在も僕の後ろに茶倉の気配。

「喰らえ龍斗！！雷パンチ！！」



「って……自分からぶつかってきいてなんなんだよ……」

この江流警荘に来て数ヶ月。女性に対する耐性がついてきたので、あれくらいの接触など日常茶飯事なのだが、茶倉にとっては大層刺激的だったらい。ちよつといい気味。

ピンポン

玄関からチャイムの音。誰か訪ねてきたらしい、誰だろうか？

「はいはい」

とりあえず引き戸を開ける。

「こんにちは、赤羽龍斗くん。君と戦いに来た」

「失礼、間違えました」

「ち、ちよつとまちんしゃいよ！！訪ねて来たのこつちだよ？！若

干引いたような目で見ながら引き戸閉めないでよ!!」

「やだなあ…若干じゃなくてドン引きしながら、ですよ」

「なんだ…なお酷いわ!!…ごほん!私の名はソロモン。特務機関、龍殺し(ドラゴンキラー)の万年係長だ。以後、お見知りおきを」

「そうかそれではさようなら」

「おおっとおそうはい神無月!!」

よく押し売り勧誘員がするような、ドアの間に足を挟んでドアを閉めるのを阻止するやつだ。まじで鬱陶しい。

「寒っ…何そのギャグ流行ると思ってんすか…?」

「君初対面の大人に失礼すぎるだろ!!話が進まないじゃないか!!」

ここは街から少し離れたところにある荒地。元は山だったのだが、ゴルフ場を作るためにとある会社が山ひとつをつぶした。その直後その会社は倒産、今となっては大きい岩や砂利が散乱しているだけの荒地である。

「あんたらの目的はおそらく僕、そうだろう？」

「そうだ。私達龍殺しは君たち龍化者の観察、および管理をしている。龍殺しには龍化者リストなるものがあつてな。その中でも君はかなり有名だ。業火竜・赤羽」

「まったく嬉しくないね。人間の考えそうなことだ。姿は似ていても本質は違つとか言つて自分と違つものを滅ぼそうとする」

「事実、私達の先祖であるホモ・サピエンスは他の類人猿を滅ぼしながら生き残つたわけだしな。まあご察しの通り、私達は君を危険視している。何のいわれもないわけではあるまい？君は少々特殊らしいからな」

僕の暴走のことを言っているのだろうか。確かに、今まで暴走したのは僕と茶倉だけだが…

「まさか茶倉も標的にされているのか？」

「いや、今回の任務は君の討伐、茶倉光はターゲットには入っていない」

「ならいい。僕が死ぬとあの荘の住民は飢え死にしまうからね、嫌でも生きなきゃいけないから全力で抵抗させてもらおうよ？」

「いい覚悟だ、少年。では行くぞ」

コートの中に手をつ込み、背中から二つの銃を取り出した謎の男。僕も戦闘形態に姿を変える

「龍の怒り（アングラー・オブ・ドラゴン）！！」

連続で拳を突き出し、殺気の砲弾を打ち出す。出力調整というものをできるようになったので、低威力ながら連射が出来るようになった。僕になっていた。

「やるな、青年よ！だがまだ甘い！」

二つの銃から閃光が走る。殺気の塊と銃から吐き出された鉛の玉が空中で衝突する。狙い通りだ。衝突した瞬間に軽い爆発が起きるように気を込めたので、その爆発によって土が舞い上がり、僕と相手の姿を隠す。

「煙幕か?!」

「ドラゴン・プレス  
龍の吐息!!」

僕の口から吐き出された吐息が空気に触れた瞬間凄まじい温度で発火する。男の周りに炎を展開し、殺さないようにする。こんなときでも僕は他者を殺めたりはしない。殺めてしまえば、僕の中の龍が喜んでしまうから。こいつの喜ぶことはしたくない。

「ソロモン72柱・ゲアブ！わが身体を他所へ!!」

炎の中に揺らめいていた男の影が一瞬にして消えた。

「なっ?!」

「なかなかの腕だな青年よ。だが殺さずして私を倒そうなどと思わないことだ」

僕の背後にその男はいた。二つある銃のうち、金の銃をまっすぐ、僕の頭に向けて。格が違う。

「おとなしく殺されてくれ、青年よ。君が死ねば当分の間世界は均衡を保てるのだ。君の大切な人も平穩に過ごすことが出来るのだぞ?」

「成る程。貴様はこうやって何人の人間を殺してきた?その不快に甘い言動で、一体何人の心を惑わせて、撃ち殺してきたんだ?!」

「嫌な質問だな。本来ならば闇討ちで君は殺される予定だった。だが闇討ちなど人間のすることではない。だから私が直々に君を抹殺しに来たんだ」

「それは貴様の恐れだろう?」

「なに？」

「人殺しである自分が唯一できる贖罪だとか勝手な解釈を付けて、自分に逃げ道を作ってたんだろうが。人を殺した時点でもう貴様は下種以下に成り下がってたんだ。それを認めたくないだけだろうが」

「貴様……！！」

ドラゴンオーラ  
「龍気迫・天地鳴動」

人を脅すときに使ったようなチャチなレベルではない、禍々しいオーラを展開する。大地が震え、大気が恐れおののき、空さえ僕の存在を恐れているようだった。

「始めるぞソロモン。ここからが本番だ」

拳を構える。拳の棘がかつてないほど熱い。

バーンナックル  
「業火の拳……！！」

自分の身体能力の限界まで力を使い接近、男に力の有らん限りをぶつける。

「なめるなよ！」

流石特務機関とか言うところから来た男、大きく身体をそらせて僕渾身のアッパーを回避した。そのまま後ろへ新体操の選手よろしくクルクルとバックステップ。

「爆裂する龍燐！！」

拳を勢いよく横に振り、拳の頭の棘を投げつける。軽い投擲ナイフだが、とっておきの隠し技でもある

「当たらん！！その程度ではな！」

2丁の金の銃と銀の銃から大量の鉛玉を吐き出させ、龍燐を撃墜するソロモン。掛かった

ドカアアアアアン！！

「ぬおお?!」

少しの刺激で大爆発を起こす龍燐。僕の今現在最強の技。

「72柱・ゲアブ!!」

さっきの瞬間移動か。これは厄介だ。

「思ったより楽しめそうだな、青年よ。だが私も負けられぬのだ。存分に語り合おうではないか!!」どちらが相手のエゴを上回るか!」

「行くぞ!!」

## 業火の覚醒（前書き）

「龍殺しが動いています」

「たかが人間風情に私たちの龍化者は敗れはしまい。ましてや私直々に調整した男だ。魂も残さず粉々にされるだろう」

「（どこまでも下衆な奴だ…）」

## 業火の覚醒

僕は主に接近戦で戦う。対するソロモンは遠距離だ。無理やりにも接近戦に持ち込めばいいのだろうが、相手もそう簡単に接近を許してはくれない。ささすが無駄に年くつたおっさんだけはある。砂を蹴り上げて目晦ましをしようとするが、瞬間移動で避けられる。移動先さえ見破ればいいのだが…

「失礼なことを思ったようだな…私はまだ20代だ!!」

「知るか。それを知ったところで何だってんだよ」

「年上に対する礼儀というものを教えてやるとしようか!!」

「その年上が年不相応のことしかやってこないのでお前は僕に年上と認識されてない」

「おおのれええええ!!」

読心術まで身に付けているか。まったく、面倒くさいったらありやしない。茶倉しかり、卑怯だろ。速さに身を任せ、パンチを打ち込むが、近接対策としてカウンターも上手いようだ。合気道に通ずるものがある。相手の攻撃を受け流し、なおかつその力を利用して自

分の攻撃を叩き込む。銃の底の部分で首の後ろをぶっ叩かれる。危うく意識が飛びそうになった。それでも意識が飛ぶないのは龍の丈夫さのおかげだろうか。

精錬された技、戦闘経験、圧倒的に僕が不利ということに変わりはない。なかった。

「青年よ、もうあきらめろ！もうお前の身体は限界を超えて動いているはずだ！喻え私を打ち倒したとしても、その身体ではもうもたん！」

「……ゲホツ…分かってんだよ…それくらい分かってんだよ…それでも…おっさんみたいな不憫なやつと戦って全力以上の力を出さないとか失礼だろ？ここで止めたらおっさんに対して失礼だろ…ここまでせつかく戦ったのに…！」

薄々感じていた。こいつは純粹なる悪党の類ではない。自分から必要悪へと姿を変えざるをえなかった不幸な男なのだ。

体内の気の巡りが悪くなってきた。枯渇寸前、ましてや制御さえ危うくなってくる。龍の怒りを放とうと拳に気を込めたら、手が焼けるように痛んだ。

「ぐあああああ?!?!?!?」

痛みが拳だけでなく、身体中に広がり、駆け巡る。痛い。逃げたい。死にたい。この苦しみから逃れられるのなら死んでもいいと思ったそのとき。

「（そいつは困るな）」

?!

「（お前に死なれたら俺が生きねえ。甘えなんか捨てちまえ、後は俺が片付けてやる）」

やめろ！お呼びじゃねえ！

「（お呼びじゃねえのはテメエなんだよ！くきひやははははは！！）」

ソロモンは感じた。青年の雰囲気が変わるのを。多重人格者がもうひとつの人格を覚醒させたときのように。そこに佇んでいたのは先ほどの青年ではなかった。ゆっくりと顔を上げた青年の顔には狂気  
の笑顔が浮かんでいた

「さーあ始めようぜおっさん…第2ラウンドってやつだ…モノホンの龍の力つてもんを見せてやるよ」

「龍が目覚めたか?!」

ソロモンの考える最悪の出来事が起きてしまった。龍の覚醒である

「やっぱ実体があるってのはいいもんだよなあ…そうはおもわねえか?おっさんよお?くきひやはははは!!」

龍化者は深層意識にもう一つの人格を形成することが多い。それは己の体に宿った龍そのものであり、力の使い方は彼らのほうがよく解っている。精神が弱いものはそのまま体をのつとられ、代わりに龍がその体を支配することとなる。青年も乗っ取られてしまったか…

「まあ俺もここで殺される気なんかねえしな。悪いがとっとと死んでくれや」

スピードは上がっていない。ソロモンが十分に反応できる速度だ。とはいっても常人には目で追えない速度なのだが。一つ違うのが、振り上げられたその拳に炎が燃え上がっていたこと。その拳がソロモンの銃の銃身をひしゃげさせ、その体に食い込んだ

「ぐおおおお?!?!」

すさまじい勢いで砂山に叩きつけられる。今の一撃で愛用の銃一丁が駄目になってしまった。事前に用意していた対龍化者用の耐火霊装がなければ蒸発していただろう。

「ナバームナックル炎獄拳だ。技名を考えるのもめんどくさいよなあ！」

ふわりと宙に浮いた青年の両の拳から尋常ではない温度の炎がメラメラと燃え盛っている。どのくらい尋常ではないかというと、青年の真下に当たる部分の地面がその温度で溶解し、溶岩溜りを作るほどに。青年の着ていた服の袖の部分が燃えてなくなってしまっていた

「（ここまで差があると嫌になってしまうな…）」

龍に吞まれた相手とは幾度となく戦ってきた。そのどれもが力に吞

まれ、自分の体を自ら滅ぼしていくのがほとんどだった。だが解る。こいつは今までのものとレベルが違いすぎるのだ。

「俺をその辺の低俗なトカゲどもと一緒にしてもらっちゃ困る。俺の炎はゼッ。ン並だ。さすがに地球を蒸発させる気はねえけど」

「冗談を言えるほど余裕らしい。まったく。私も不幸な星の元に産まれたものだ。」

届かぬなら、力で語り合う（前書き）

「準備はできたのか？」

「今しばらく時間がかかります」

「そうか。どちらにしろ、楽しみだ」

届かぬなら、力で語り合う

「くきひやははははは！！！！！！燃えろ燃えろ！！燃えてしまえ！！この世のすべてが燃えて崩れて灰になればいい！！」

手のひらからおそらく数千度以上の炎を発生させながら赤羽龍斗だったものは残酷に笑う。ファイヤーボールとかいうレベルではない飛び回りながら炎を撒き散らし、着弾地点を次々溶岩溜りにしていく。外気温の著しい上昇、蒸し焼きになりそうだ。……………こいつまさかそれを狙って？！

「俺はこいつみたいに馬鹿じゃねえ、勝てば官軍負ければ賊軍ってなあ！！絶対勝てる状況まで持っていくまで、あんたをいじめさせてもらうぜ？」

「なるほど、本当にクソツタレな龍に憑かれたんだな。赤羽龍斗も不幸なものだ」

内心彼に同情を覚えながらソロモンは次の手を思案する

「（彼は龍、私は人間。彼は龍である自身の特性を十二分に生かしながら私を<sup>なぶ</sup>蹴り殺しにするだろう…どうする…どうやってこの状況を打開する？！）」

残った銃は一つ。残り残弾もあとわずか。

ゲアブの瞬間移動で後ろに周り込むとしても彼の回りの熱は私の身を焼くのに十分な温度だ。身を焼くというより蒸発させてしまうかもしれない。先ほどの愛用の銃の最期から見てそう考えるのが妥当だろう。近接格闘は不利だ。ならば遠距離は？

「喰らえ！！」

2発の弾丸を放つ。その弾丸は龍の体を貫くことはせず、その体を通り過ぎていく。

「膺気楼って知ってたか？今てめえが撃ったのはま・ぼ・ろ・しw  
w」

そつえば彼の姿の輪郭が揺らめいているような気がした。暑すぎて正常な判断ができなくなってくる。精神的にも追い詰められていた

「（こりゃあ…無理っばいな…これも私が背負ってきた業が招いた結果かな…）」

諦めが脳内を駆け巡り始めようとしたそのときだった。

「地雷」

突如地面から雷が飛び出した。それは荒縄のように、そして蛇のように体をくねらせ赤羽を縛り付ける。強力な電撃が赤羽の体を駆け巡り、悶えさせた

「ぐおおおおおおお?!?!?!」

「わちを差し置いてずいぶん楽しんでるようだな、龍斗」

「君は…」

「お前が何しに来たなんて今は置いておくとして、だ。一刻も早く龍斗を正気に戻さなければならぬ」

赤羽の幼馴染、茶倉光がそこにいた。

「まあた性懲りもなく暴走したのか？世話の焼ける友達だよ…一つ貸しだつてことにしとくか」

地面に不自然な影が発生し、そこから黄泉川堺人が姿を表す。その背中には漆黒の羽が、実体のない陰のようにゆらゆら揺らめいていた。

「おっさんはそこで野たれてるといい、邪魔」

「いくぞ黄泉川！」

「あいよ姉御」

「クソがあああああああ！！！！」

雷の拘束具を力任せに引きちぎる業火龍。全力を出してはいないとはいえ茶倉は大いに驚いた。そう簡単にはいかないらしい。

「コケにしてくれやがって低俗トカゲ共があ！！もういい！！この町ごと蒸発させてくれるわ！！」

天に突き上げた両の手のひらから熱エネルギーが放出され、巨大な火の玉が発生する。さながら小さな太陽のようだ。

「やらせねえよ、展開、ヤミノフィールド（黒い領域）」

黒い片翼から黒い羽が撒き散らされる。その羽は空間に張り付き、何もない虚空を生み出していく。

「燃えて墜ちろ！！」

投げつけられた太陽は3人に向かって墜ちていく。その手前虚空が立ちはだかり、太陽を黒に染め、取り込んでしまった。そのまま空間は元の空へと戻っていく

「な…?!」

「俺に対する憎悪が大きければ大きいほど俺の力は増す。よっぽど俺たちを消し炭にしたかったのか。だがな、憎悪を以て俺は殺せな

い。俺を倒せるのは純粹なる心だけだ」

業火龍の背後にあの虚空が発生する。

「憎悪に駆られし者は己が憎悪によって身を滅ぼす。お返した」

先ほどの太陽が、発生させた本人に帰っていく

「なめんなクソツタレガアア」

あろうことが火球を片手で掴み、そのまま握りつぶしてしまった。

「くひゃ…くきひゃははあ…!!甘かったようだな…」

「天雷・ミヨルニルサンダー（雷撃の大槌）!!」

上空に雷で構成された巨大な槌が発生、業火龍に向かって振り下ろされる

「あ、詰んだ」

驚くほどあっけからんとした言葉遣いでつぶやく業火龍。 瞼を突き  
抜けるほどまばゆい閃光。

「ん…？」

「起きたか、業火龍よ」

僕の部屋だ。壁に貼ったみつをのカレンダー、机の上のカリカリ梅  
干。そして少し煤けた天井。

「俺は…違った、僕は…」

「私の完敗だ、業火龍…いや、赤羽龍斗。君は私たちが思っていたよりもはるかに強い。その力を自覚することだ。さすれば運命<sup>さため</sup>すら変えることが可能かもしれない。だが忘れるな、君は君が思っよりずっと恐ろしいものだということを」

「待て、ソロモン」

「？」

「次は勝つ。僕の力で」

「……フツ…楽しみにしているよ」

ソロモンと入れ違いに茶倉と黄泉川が入ってきた

「龍斗…心配させてくれやがってうわあああん…！」

いきなり抱きついてきやがった茶倉。僕の首筋に一滴の水がつたう。  
…泣いてくれているのか？

「おおっ…早速お邪魔虫かよ俺…じゃあ後日改めてってことではいなら」

逃げるように去る黄泉川。…ナイス。

「何かあったの？」

ドアの向こうから大家さんが顔を出す。この状況はヤバイ。黄泉川め、ドアくらい閉めていけ！！開けたら閉める、基本だろうが！！

「……茶倉ちゃんばつかずるい！！私も！！」

「え？」

部屋に入ってきて寝ている僕の上に覆いかぶさるように擦り寄ってきました。体が痺れてるんで腕どころか全身動きません。ぼくはそのまま二人が気の済むまでしがみつかれてました。

## 穿たれた心（前書き）

一回くらいヘタレたっていいじゃん！心は人間なんだもの…

## 穿たれた心

僕は一人江流鷲荘の屋根の上に寝転がっていた。青い空を見つめ、自分に突きつけられた現実というものを思い知っていた。あのときの傷は、自分でも気持ちが悪くなるくらい早く治った。全治1週間ほど。病院の医者になにか気持ちの悪いものを見るような目で見てきた。吐き気がする。

「くそっ!!」

やり場のないフラストレーションは声にすべて乗せて空へと吐き出した。その声とともに火花が空へと向かって飛んでいく。その火花は線香花火のように儚く、空へと消えていった。強まっていく力とともに自分が化け物という現実を突きつけられる。少し前に偉そうにヒイロに説教した自分が恥ずかしくなった。黒歴史がどんどんうず高く積まれていく。

これでは三下雑魚となんら変わりはない

「（ふあゝあよく寝た!）」

「?!」

頭の中に響く声。今一番聞きたくない声だった。

「（よう相棒。どうだ？自分が正真正銘のクソツタレにとり憑かれた気分はよ？）」

「うせやがれ、一人になりたい気分なんだよ」

「（ほー、まあどうしようもないってことくらいは馬鹿でもわかるか。くきひやははは！俺とお前は一心同体だー！！なんてな！）」

「やめろ、腐った連中が寄ってくるぞ。いろんな意味で」

「（くきひやははは！ずいぶんと余裕だな！いつ俺がお前の体を乗っ取ってもおかしくないってんによ？）」

「……あのとき僕は殺されなければならなかったんだ。どうしてあいつらは僕を生かしたんだろうか。ソロモンも…僕が気絶している間ならいつでも殺せたはずなのに」

「（…あー！もう！！辛気臭せー！な！！お前があいつらに必要

とされてるからあいつらはお前を生かしたんだろうが……！……！……！  
俺の株が無駄に上昇しちまうじゃねえか！！

お前がヘタレたら俺が迷惑なんだよ！！龍化者の能力はメンタル面に強く影響してるって自分なりに考察立ててたじゃねえか」

「ヘタレは生き残れないってか」

僕のそんな様子にあきれたのか、こんなことをほざく。

「（なんなら俺がしばらく変わってやろうか？）」

「……………結構だ。だが、いつでも乗っ取れるというならなぜそれをお前はしないんだ？いつでも乗っ取れるんじゃないのか？」

「（お前が弱つてるときが一番乗っ取りやすいんだよ）」

「あ、そ」

強くなりたい。龍さえも蹂躪できるほどに。なぜ？そっぴやなんで僕は強くなりたいんだろ？守るべきものも、誇りも、何もない。強くなってどうするんだ？襲い掛かってくる同族やソロモンのような自分たちを疎ましく思う連中たちをを片っ端からぶち殺していく

ため？…おそらくそうなのだろう

江流警荘の皆は…… ipp てみればいつでも切り捨てられる。ほんの一時の、心の休息と思えばいい。化け物と人間は生来相容れぬもの。誰にも迷惑をかけずに、どこかで一人で暮らせばいい。いつかこの化け物を淘汰できるようになる、その時まで

「（冷徹な考えだねえ… まあ俺はお前が死なないでくれればまったくモウマンタイなんだがな）」

「そうだな… 家出すつか」

龍は彼の決断に半ば呆れ、半ば言いようのない寂しさを感じていた。

「（ニンゲンってのは… 脆いもんだねえ…）」

「りゅーとさーん、今日の晩御飯はぐってあれ？」

今の大きな机の上に一枚のメモ。見慣れない、ちょっと汚い文字だ。誰のメモだろうか？

（ちょっと用事で出てきます。しばらく家を空けるので後のことは  
お願いします 龍斗）

「何の用事だろ？まあいつか、今日は誰が当番だっけ…（しばらく家を空けます）……ってえええー！……！！！！！」

大家さんの絶叫が江流警荘に響き渡った。その夜、緊急のミーティングが開かれる。そこで彼女たちは気づくのだろうか。彼の、自分たちが思っているよりずっと弱かった、赤羽龍斗の孤独なる決断に

## 穿たれた心（後書き）

やっぱこうなるでしょ、自分が化け物になっ  
たって言うんだっ  
たら  
w  
w

行き着いた場所、逃げられない運命（前書き）

いやあ、大分間を置いてしまいましたがすみませんでした。いろいろ仕事が大変だったんですよハイ

あえてもう一度言わせてもらおう、ごめんなさいと！！

## 行き着いた場所、逃げられない運命

「とりあえずはここでいいか」

前回の家出同様、少ない荷物を若干ほこりのかぶった机の上に置く。僕が今いるのは自動養護施設時代に見つけた廃屋の中である。ホラ、誰にだってやむち…じゃなくて、ヤンチャだったときってあるわけじゃん？秘密基地とかに無駄に憧れた時代ってあるじゃん？廃屋とかなんか興味を引かれるじゃん？

江流駑荘、施設両方ともにけっこう遠く、普段人通りも少なく隠れ家には最適。近くに川もあり、快適なアウトドアライフを暮らせること間違いなし。とはいっても長居するつもりはない。黄泉川が龍化者探知能力を使って見つけようとしてくるかもしれないからだ。別に家電製品がなきゃ生きていけないってわけでもないだろう？こういうところで人類は本当に貧弱になったなあと思う。

「前来たときとほとんど変わってないなあ…下手に崩れてなくてよかった」

「（ほゝここが俺たちの愛の巣か？）」

茶化すようにほざきだすこの龍。いまさらだが、凄まじく龍らしくない

「そういう発言マジで控えろ、作者にB.L要素を期待するんじゃない。ペーコンレタスお前も一応雄じゃないのか」

「（そうだな、タチの悪い同人誌になっても困るし）」

「そういう知識はどこから持ってくるんだよ……」

脳内で響く声というものはそれなりに気持ちが悪いだ。

アウトドア用品は最近なんとなく買ったものがある。袋からテントから寝袋からその他エトセトラを取り出していく。火を使わない蚊取り線香とか。鱗の部分以外は人間の皮膚なので蚊に刺されるとやつぱりかゆいのだ。（衝撃にはかなり強いが）そのとき、ポンという軽い爆発音

「よっと」

「？」

僕の目の前には小さな幼龍がいた。携帯釣りゲームでこんなドラゴンがいたような気がする。

「おまえ…実体化できてんじゃん」

「今テキトーにやったらできたww」

「はぁ…あと草生やすな」

「今日から俺がマスコットキャラだ！よろしくな！」

「お前これからどうすんのよ？ノープランなんだろう？」

「とりあえずは適当に旅する感じで行く。あての無い旅とかやってみたかったんだ」

「計画性ゼロ、マジで馬鹿だったんだなお前。金銭面はどうすんだ。未成年だろお前？雇ってくれるバイトなんざたかが知れてるし。何より身元が不明の青年だ。ロクな仕事はもらえないだろうな」

シカトする。口は悪いのに頭がいいのがちょっと腹が立つ。

夕方になって暗くなってきたので、とりあえず明かりの確保を優先する。摺りガラス風のコップにちよつと力をこめた鱗を入れる。ぼんやりとキャンドルのような儚い光を放ち始めた鱗。ひびの入った壁をやさしく照らす。殺伐としたこの部屋のちよつとしたインテリアだ

「ほー、ロマンチックだな」

「龍化とかなけりや僕も彼女の一人は作りたかった…」

「貧乳派だったなお前は。江流弩荘は巨乳が多かったな」

「……………勝手なことをほざくなよ」

「今の間は何だよ今の間は」

ある程度荷物を広げ終わり、おやつに買っておいたグミを食べていたときのことだ。そういえば歯もだいぶ鋭くなってるようだ。軽く噛んだだけでグミがばらばらに切断される。噛みごたえもへったくれもない。ちよつと味気なくおやつを堪能していたときだった

ぞくり

背筋に走る悪寒。かつてヒイロや黄泉川と出会ったときのような感覚。近くにいる

「気づいたか。どうすんだ？このまま逃げ続けるつもりか？それとも前のように甘ったれた行動でまた逃げるつもりか？」

「降りかかる火の粉は払わなきゃならない。もつとも、火の粉をばら撒くのは僕たちだけだな。そいつが人外だとしても、僕は元人を

殺すなんてできやしないだろうさ」

「くきひやははは！！いいだろう、行くぜ」

龍がふつと消えた。僕の中に再び戻ったのだろうか。

「お前、龍化者だな？」

外に立っていたのは冷徹な雰囲気を持つ男。冷たい、冷え切った視線でこちらを睨んでいる。ぶっちゃけチャラ男にしか見えない。

「それがどうした？だったらどうする？お前も同じ境遇のもの同士で殺しあえば治るとか言う根も葉もへったくれもクソもない俗説を信じているもののクチか？」

「そうか、知っているなら話は早え、始めっか」

川の水が生き物のように動き出し、僕の周りを包み込む。巨大な水の塊が僕を飲み込もうと迫る。まいったな…あまり得意でない属性

というやつだ。火は水を嫌がるもの、それがセオリーだろう。ならばどうする？火以外で攻めればいいだけのことだ。

「龍の叫び（ドラゴンシャウト）――！」

腹の底で思い切り気を圧縮、口から狂気の絶叫として吐き出す。その空気の震えは僕を中心にして大きく輪になり水を退けた。はじけた水の塊が霧状になり、虹を作る。ますます人外臭い。自分で自分に嫌悪感を抱く。

あいつが耳をふさいで怯んでいる。そしてこちらを化け物を見るような目で見てきた。いや、化け物だけどさ…怯え、畏怖、恐怖…その視線は敵に向けるものでもなく、味方に向けるようなものでもない。圧倒的な暴力に対する恐怖の視線だ。その視線が僕の心を容赦なく抉る<sup>えぐ</sup>

「どうした？格の違いにビビったのか？…僕は戦闘を楽しむようなタイプじゃないからな。早々に終わらせようか」

踏ん張り、拳に力をこめる。拳の頭の龍棘<sup>りゅうげき</sup>がせり出し、切り裂きたくて仕方ないといわんばかりに鈍い光を発する。破壊衝動が内側から湧き上がってくる。壊したい壊したい壊したい！！！！っと、抑

えて抑えて…別に怒っちゃいませんか？ちこつと頭に血が上っただけですよ

「くそっ…この力だけは使いたくなかったけどなあ…お前を殺すためだ、仕方ねえだろ」

男の目が狂気に輝いている。それなりに端正だった顔立ちはゆがみきり、気持ちの悪いニタニタ笑いを浮かべている。ヤダナニこいつ気持ち悪い。ぞくりと背筋に緊張が走る。何かとんでもないことをしでかそうとしている感じ満々だ。先ほどはじけた水の塊が相手を包む。

オーバーロード・ドラゴン  
「極限龍化！！！！」

やつの顔にどんどん鱗が浮き出してくる。それは一瞬のうちにして全身を多い、程なくして相手は完全な龍の姿になった。四つん這いで長い尻尾、背中には翼、蒼い鱗が水しぶきに反射して美しく輝いていた。大きく大地を踏み鳴らし、その龍は吼えた。

「グオオオオオオオオ！！！！」

「……マジかよ……」

「（くきひやははは！……やばいなこりゃ）」

若干切羽詰まったような声が僕の脳内で響いた

ソフトボール大の大きさの水球がそこいらじゅうに浮いている。あの水龍が出現させたものだ。時としてそれはそのまま突っ込んできて体当たりしてきたり、形鋭く変化させ水の槍としてこちらを襲う。はじけ飛ぶ水しぶきも僕の鱗を傷つけるほどの威力がある。そして龍が操っているせいか、とても蒸発させにくくなっていた。

そして何より龍の大きさと怪力、リーチ。オールレンジ攻撃がこれほど恐ろしいものだとは思わなかった。対抗できるのか？今の僕的能力で…鞭のようにしなる尻尾をよけながら思案する。

一瞬の隙を付かれ足首を尻尾にからめとられてしまった。大きく大車輪のように振り回されたあと、地面にすさまじい勢いで叩きつけられる。人の域を超えた身体能力の龍化者としてこれは流石にシャレにならない。肺から空気が抜け、背骨が悲鳴を上げ、全身の肉がギ

シギシという嘆きの音を漏らす。地面にめり込んだ。痛みで動けなくなっている僕に向かって容赦なく尻尾を振るう水龍。2撃、3撃。

「かはっ…ごほっ…」

「（死なれたら困るからな、いざって時は俺が変わらせてもらっぜ？くきひやははは！！）」

「（黙ってるクソツタレ！！）」

翼を使って大きく後ろにバックステップする。そのまま飛び、空に逃げる。水球が襲い来るが、龍の怒りをぶつけて威力を軽減、裏拳ではじき返す。そろそろ僕も殺す気で戦わなきゃいけないようだ

「覚悟はできたか？お祈りは済ませたか？跪いて僕に許しを請う準備はできたか？では、終わらせるぞ！！」

龍棘を勢いをつけて大量に投げつける。龍の力が色濃いためか、それははじかれることなく水龍の鱗を貫き、肉に食い込んだ。

「オゴオオオオ？！」

「炎鱗・爆裂龍棘！！」

突き刺さって爆発する危険な鱗が水龍の鱗の内側、つまり肉を直接業火であぶる。肉片が次々と弾け飛んでいく。血をダラダラ流し、息も絶え絶え、それでも闘争心の鈍らない龍の目の前に迫るもの。殺すはずだった相手の拳だった。ここまでして。人に戻ろうとして龍に成り果て、それでもあきらめず同じ境遇のものを殺そうとやってきた水龍。ここで彼はやっと諦めという感情を覚えた。

「炎弾・業火爆裂拳」

龍の脳天にすさまじい衝撃が伝わる。龍の分厚い顎の骨すらも通り越して、その一撃は龍の脳を揺さぶった。暗転する世界。最期は人の姿ですらなかった自分。手段のために目的を見失ってしまった哀れな生き物が、大きな音を立てて地面に崩れ落ちた

行き着いた場所、逃げられない運命（後書き）

読みづらいよね…ごめんね…ひどすぎるよね…（某姫様）

こんな感じでどんだんがんばっていきますでしたら応援してください  
い

## どうしようもなく、優しい男（前書き）

他の小説はほいほい進められるんですが、完全オリだとやっぱり難しいです。ドラゴノイドだけが更新速度激遅なのはそのためです

どうしようもなく、優しい男

「う…」

目が覚めたとき、俺は廃屋の中で横たわっていた。ひたすらに汚い天井を見上げながら先ほどまで自分が何をしようとしていたかを思い出す。目の前に迫る紅い弾丸、脳天に伝わる衝撃、暗転していく世界。体が地面に崩れ落ちる衝撃

「（そうか。負けたのか。んで、俺はなぜ生きているんだ？）」

素朴な疑問が浮かんたそのとき、隣で何かを租借するようなくちやくちやという音。

「お、起きたのかよ。やっぱ甘つちよろいな、お前ってやつはよお？」

「するめ齧りながら喋るな黙ってる。鱗一枚ずつ剥いでいって、ブリーチ原液に漬け込んでやろうか。それとも火を吐いた瞬間に鉛流し込んでやろうか」

「それキメラの殺され方じゃねえか。臓物<sup>はらわた</sup>焼くなんてえげつねえ…」

聞いたことがある声だ。というかさっきまで殺しあつてた相手の声だ。負けた上に慈悲までかけられる。なんとも情けない

「傷が癒えたらとつとと失せる。僕は貴様らのような者とはあまり係わり合いになりたくないんだ」

「へたれて逃げ出してきたお前が言つのか？」

ガツン！という大きな音。男の隣にいた小さな龍の脳天に大きなたんこぶができていた。さっきまで殺しあつていた相手の目の前で、なんと言うか、気の抜けたというか、緊張感のない感じた。友人とつるんでいたときのような感情を覚える

「俺は…どうすりゃいい？」

男はどうでもいいといった風に、先ほどの小さな龍から取り上げたするめの袋からするめを取り出し、天井を仰ぎながら言った。

「僕に聞かれても知らないな。なぜかそんな俗説が龍化者にだけ流れているかもわからないし、とりあえずは面倒なことが渦巻いてるってことしか僕にはわからない。僕は細かいことを考えるのが苦手なんだ」

「俺もだぜ？俺自体も俺自身が何なのか明確にわかったわけじゃないしな。知っていることを洗いざらいはいてから帰ってもらおうか」

男と違ってこの龍は抜け目がない。粗暴な言葉遣いとは裏腹に、機知には富むようだ

「……………俺は…妙な男を見た」

龍化した数日後、戸惑う自分の前に妙な男が現れたという。その妙な男はすべてを見通したような口調でこう言った

「同じもの同士殺しあえば治るかも知れんな」

追い詰められたとき、人はそれがどんなことであれ実行してしまうことが、ままある。溺れる者は藁をも掴む、まさにそれだ。たとえ情報源が怪しいおっさんでも、龍化という訳の分からない病に犯さ

れ、ただ化け物と化していく自分のことには代えられない。ならばどうする？

実行だ

「そのクソ野郎の特徴は？ ふんじばっていたぶって全部吐かせる」

落ち着いた雰囲気割には好戦的なようだ。

「分からない……なぜだかそのことは思い出せないんだ。白昼夢でも見たような……というか夢だったのかもしれない。気がつけばその言葉が頭の中を駆け巡るんだ。気が狂いそうだった」

「戦闘中は完全に狂っていたがな。夢にしては出来すぎてる。僕の友人だったもの……そいつも龍化者だが、同じようなことを言っていた」

ふと疑問が頭に浮かぶ。

「何でそのとき色々訊かなかったんだ？」

同時に突っ込まれました。まさに正論です本当にありがとうございます

「いや、そいつは龍化したことで傷ついてたし改めて傷口抉るのも  
どうかなあって……」

「あんた、悪いやつじゃなさそうだな」

「僕は自分が悪人だとは思ってはいない。来るもの来るもの全員が  
恐ろしくてしょうがない、臆病者だよ」

彼は頭をガリガリ掻きながら悲しそうに目を伏せた。この人は  
優しい。自分の身を削って他人を全力で助ける、どうしようもない  
くらいに優しい男だ。ゆえに自分を助ける方法を知らないのだろう。  
強い体に繊細な心というものはどうしようもなく脆い

「あんた、龍化したときどう思ったんだ？この力は何だと考える？」

「……僕は、この力が罰だとは思っていない。神が僕たちに与えた試練だとも思わない。僕は僕以外が傷つかなければ、それでいいと思っている。だから逃げ出してきた。君は、もう去ったほうがいい。人外が集まるところでもないことがあるのがセオリーってものだ」

苦笑いをしながら男は言う。拳を強く握りすぎて掌から血が出ていた。俺は立ち去ることにした。だが、もう龍化者を襲おうとは思わなくなった。受け入れ、許容する。それもまた大切なことなのだろうか。ガキの俺にはわからなかった

「……………ありがとう」

「……………」

ドアのない玄関らしきところから、足を引きずりながら出て行く水龍。どうか彼の人生に精一杯の幸あれ、そう思ったそのときだった

## 燃え上がる贖罪の焰剣（前書き）

お久しぶりです。どうでもいいですが、ゴジラのMADを見てたら急に創作意欲がわいてきまして。今回はちょっとだけ多めになっております

## 燃え上がる贖罪の焰剣

ガァー――ン――！！

乾いた銃声が寒空の下に響き渡る。水龍の背中から赤い液体が、噴水のごとく噴出するのとはほぼ同時に。

「あ、え？」

僕の目にはゆっくりと、埃っぽい床に仰向けに倒れていく水龍の姿がスローモーションのように映った。



外から声。確実に犯人だ。今の僕にある選択肢はたった一つ。

「殺す」

「おいおい……俺が憑いてなくてもこれかよ……しよーがねえ、行くぞー!!」

「ふう〜ん、貴方が話題の赤羽クン？思ったより優男っぽいわね」

「でーたによるとおからがにがてだつて。こどもっぽ〜いwww」

外にいたのは少女二人。納戸色の短髪を風に揺らめかせる姉らしき少女、そして鳶色の長髪を後ろで一括りにしている妹らしき少女。

姉のほうの右手にはライフル並みに大きな銃、左手にはいろいろ仕込んでありそうな大きな籠手をつけ、前に戦ったソロモンが身にとっていたような不可思議な模様の縫い付けられた服を着ている

妹のほうは近未来的な（？）車椅子に乗っており、服装や車椅子にも姉と同じような不可思議な模様がついていた

「……………龍殺しか」

「あつたり〜い、私は皋月<sup>さつき</sup> 蘭<sup>らん</sup>。龍殺し最強の重火器使いです」

「おなじく！ 皋月 恋<sup>れん</sup>！！ りゅうごろしでいちばん機械大好き  
！！」

一見無邪気な姉妹だ。先ほど彼女らは水龍を射殺したばかりであるにもかかわらず、純真無垢ゆえの夕チの悪さだろうか。まったく罪の意識を感じていないらしい

「龍殺しねえ……………なんでこいつを撃った？」

もうピクリとも動かなくなってしまった水龍を見ながら僕は問う。彼の周りには、大きな赤い湖ができていた。蘭と名乗った少女がしたり顔で話し始める

「私たちは龍殺しの中でもどつちかってーと急進派って流派っぽいところにいるのよ。早い話がただ観察するだけじゃつまんないから片っ端から龍化者ぶっ殺して行こうって言う考え方のやつが集まった集団なのよ」

「いわゆる過激派ってやつか。道理でクソツタレな雰囲気なわけだ。ということは、僕も殺しに来たのか？」

「えくすたしいいゝゝ、またまたせいかりーい！！正解したご褒美に私と恋特性の龍化者用・特製鉛の弾丸を差し上げまゝすゝ」

言うが早いが常人離れた速さで銃口をこちらに向け、彼女の言う「特製弾丸」を放ってくる。やつちゃってもいいよね？答えは聞いちゃいないし聞く相手もないのだけれど

交互に突き出した拳に一時的に気を滞留、一気に炸裂させる。いわば気のショットガンである。怒りの感情に反応して龍化能力が上がっているのか、一発一発が着弾するたび大爆発が起こる。当然弾丸は打ち倒される

「覇龍拳………撃！滅！」

「反応速度は上々、少なくともズブのド素人ではなさそうね。いいわ、楽しくなってきた！逆境であればあるほど燃えちゃうじゃない！」

「お姉ちゃん！またどえむになってるよ！」

「楽しくおしゃべりしてんじゃねーよ！」

砂を拾って思い切り投げつける。目潰し兼散弾。え？主人公らしくない？もとより主人公意識なんて無いのだけれど

「あまあゝゝい！」

蘭の左手の籠手が一瞬にして拡張、薄いビーム（？）膜を張り砂の散弾を無効化した。すごいテクノロジーだな。………計画通り（笑）

「そつちがね」

「「え？」」

「うおらあああああああああああああ！！！！！！」

龍棘を長めに伸ばしておき、大地に突き立て、てこの原理で思い切りひっくり返す。ちやぶ台返しって知ってる？あれを大地で再現したような感じ。彼女らには巨大な壁が自分たちを押しつぶそうと迫ってくるように見えるはずだ

「なめないでー！！！！」

恋という妹の車椅子から鋭い刃物のついた触手のようなものが無数に伸び、ひっくり返ってきた大地をばらばらに切り裂く。予想通り  
(笑)

土壁に身を隠しあらかじめ空中に飛び上がっていた僕は、翼を思い切り羽ばたいて土を彼女らにプレゼントする。その結果、大量の土

砂が二人に降り注ぐ。これが僕の気持ちですってか？

「これがホントの土石龍ってな」

「くっ……恋（お姉ちゃん）だけは守るんだからああー……  
！……」

二人が同時にシールドらしきものを発生させ、土石流を防ぐ。だが、圧倒的な質量の土砂を華奢な二人が耐え切れるはずも無い。

「……あっけな」

「うっ……ん……うっ……のも……悪く……な」

「うっ……」

やっぱりやりづらい。女と戦うつてのは。地上に降り立ち、土だるまと化している二人を観察する。次の瞬間蘭の眼に生氣が戻る

「油断してんじゃないわよ!!」

左腕を振り上げ、氣迫らしきもので土砂を一気に吹き飛ばしてきた。すさまじい轟音とともに土砂が一気にあたりに降り注ぐ。よくぞ女の身である量の土砂を吹き飛ばせたものだ。

オイオイちょっと、ニット帽の毛糸の間に入ったら取れないんだから勘弁してくれよ。洗濯機の洗濯槽が砂だらけになっちまうじゃないか。コインランドリー出禁なんて聞いたことがない

さてよ？龍氣迫をもうチヨイ発展させれば傘とか作れるんじゃない？やばいな、雨の日とか傘いらずだな!!

「ぶち抜けぶち抜けぶち抜けぶち抜けえ!!」

銃の横の部分から大量の使い終わった薬莢が飛び散っていく。銃口

から大量の鉛弾が大量に僕に放たれる。

「消える消える消えるきえろお！！」

妹のほうは先ほどの触手を縦横無尽に操り、僕の皮膚を切り裂こうと振り回してくる。触手を掴み他の触手を受止めたり、銃弾を触手で防御しながら、僕は思案する。

もとより気絶ですまないようにしようと思っていたのだが。これ以上彼女らに「まだ戦って倒せる相手だ」という幻想を抱かせてはならないだろう。絶対に敵うはずのない相手だと思わせて、尻尾を巻いて逃げ帰らせたい。まだ犯罪者になりたくはない

先ほど水龍と戦ったときに、胸の奥ででちりちりと燦っていた新たな力。目の前には自らのエゴイズムで他人を容赦なく殺した敵。発火剤は十分だ

翼で羽ばたき、風を投げつける。物理的なものは防げても非物理攻撃なら多少は怯む。そうして僕は一旦距離をおき、心を落ち着ける

めらめらと両の拳から炎が燃え出す。それは溶けたマグマのように下へと流れ落ちていく。それに伴って龍棘も伸び、さらに鱗が腕全体を被い、凶悪な、刺々しい簞手の様な形に変化する。まるで木の成長を早送りで見ているようだ。

燃え上がる炎はやがて固まり、程なくして強大な熱を放つ剣になった。

「龍棘剣……………業焰龍皇」  
カイザー・オブ・フレア

## 燃え上がる贖罪の焰剣（後書き）

この炎の剣は連載当初からずっとやりたかったネタです。後もう一つやりたいことがあります。極限龍化もそうですが、それ以外にももう一つ。お楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7209r/>

---

ドラゴノイド～龍化病～

2011年11月13日20時42分発行